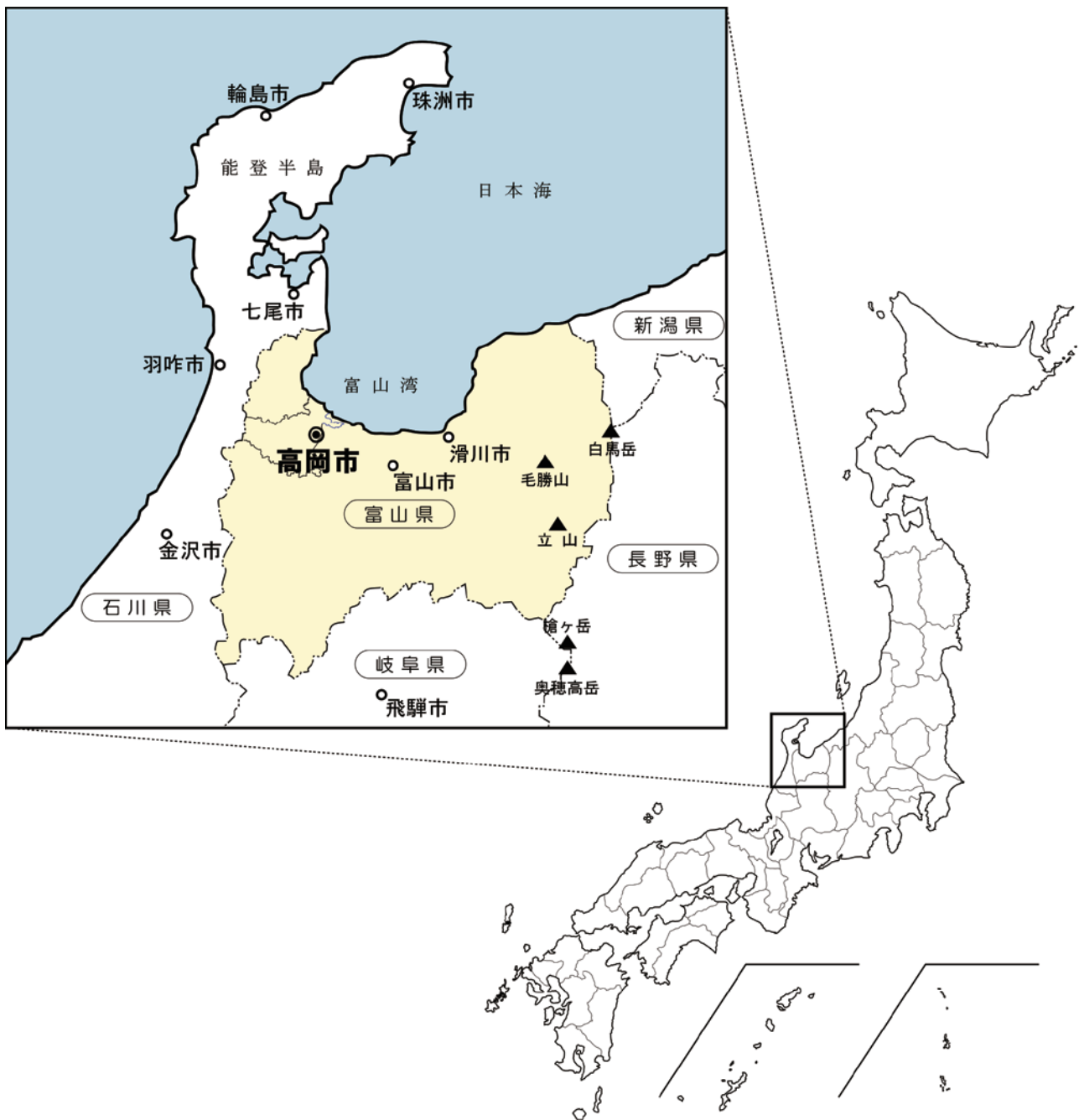


第1章 高岡市の概要

1 自然的・地理的環境

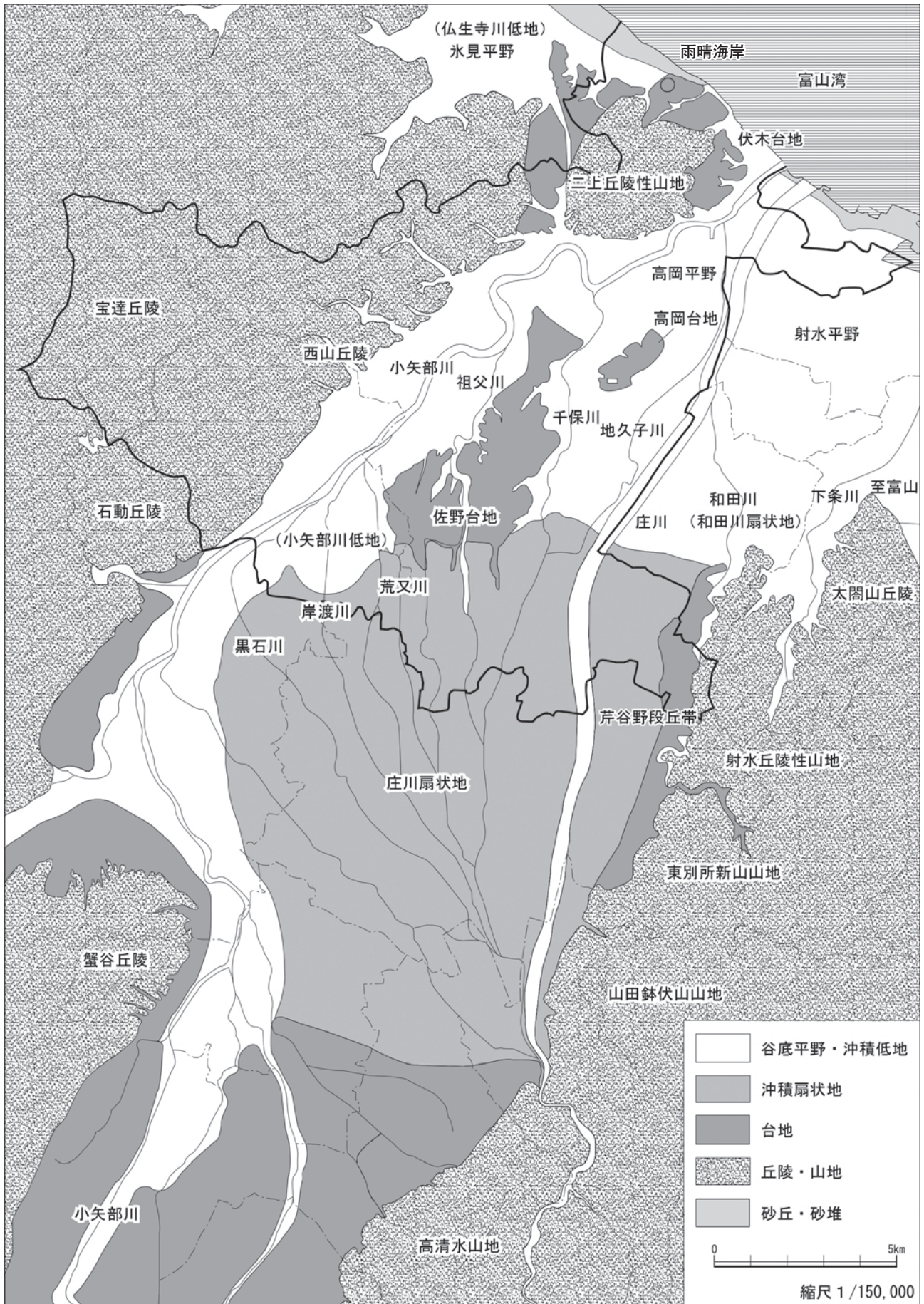
(1) 高岡市の位置・面積

高岡市は、富山県の北西部に位置し、東西24.5km、南北19.2kmに渡り総面積は、209.58km²（20,958ha）である。北東は日本海に面し、東側には庄川と小矢部川によって形成された平野部が広がり、西側は二上山及びこれに連なる西山丘陵からなる山間部となっている。日本の渚百選に選ばれた雨晴海岸からは、海越しに3,000m級の立山連峰の大パノラマを見ることができ、平野部には良質な地下水を有する扇状地が広がるなど、深緑と清らかな水に包まれ、四季折々に変化する豊かな自然に恵まれている。



高岡市位置図

(2) 地形・地質



高岡市周辺の地形分類図

高岡市の平野部は、^{と なみ} 砺波平野と^{い みず} 射水平野に跨っている。砺波平野は、市域東寄りを流れ度々氾濫を起こしてきた庄川の扇状地である。射水平野は、庄川と市域西寄りをゆるやかに流れる小矢部川の2つの河川がつくった三角州や氾濫原から成っている。庄川扇状地の扇端部にあたる市域南部の標高20~25mあたりは、伏流水が泉となって地表面に湧き出る湧水帯で、その北に広がる標高10~20mの一带は、井戸を掘ると水が噴き出す自噴井帯である。このため、市域内に湧水帯と自噴井帯が広がり、水に恵まれた地域となっている。

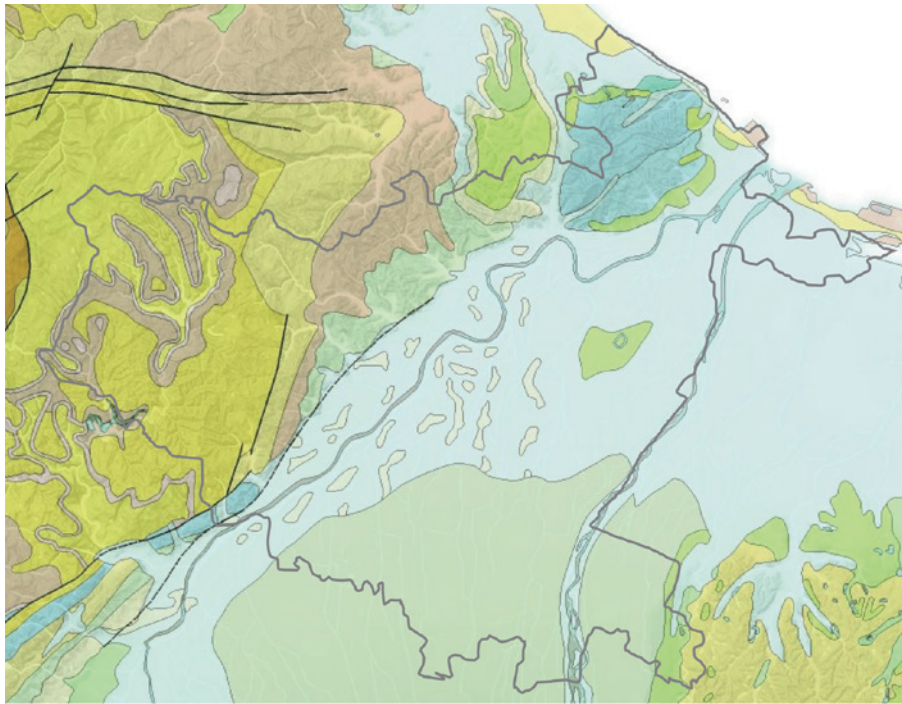
市域の平野部のほぼ中央に位置するのが、標高10~20mの高岡台地、佐野台地である。それを囲むように地^じ久^く子^し川^{せん}・千^ほ保^ぼ川^そ・祖^ふ父^ふ川^{あら}・荒^{また}又^が川^ん・岸^ど渡^{くろ}川^い・黒^し石^{くろ}川^いといった小矢部川の支流が市内を縫っている。南東部は、射水丘陵に属し、この丘陵の西側には、和田川を挟んで、^{せり}芹^{だに}谷^の野^{ほん}・^に般^の若^の野の細長い段丘が発達している。

一方、市域の西から北にかけて、石川県境まで続く宝達山系の西山丘陵と二上丘陵が連なっている。二上丘陵は、西側は断層によって急崖を形成しつつ一段低い西山丘陵に続き、北東は絶壁となって富山湾に落ち込み雨晴海岸の景観美を作り出しているなど、独立した山地の形になっている。また、主峰の二上山の標高は274mに過ぎないが、周辺に高い峰がないため、実際よりもはるかに高く見える。二上山の山容やその優美さから遠く古代から神霊が宿る山として人々の信仰の対象となっている。

平野部の地質は、庄川扇状地においては砂礫を中心とする土砂からなり、その末端においては砂質系の細粒分が多い土質が分布する。氾濫原や三角州においては河川で流された砂礫の堆積物が多い。射水平野の海岸近くにおいては、シルト質細砂等の土質が分布し、市域の北端の氷見平野においては細砂や極細砂を中心に砂質系の土質とシルト質の土砂が分布する。二上丘陵・西山丘陵がある丘陵部の地質は、主に砂岩、泥岩や凝灰岩で形成される。



佐野台地上の湧水(住宅にも湧き出ている)

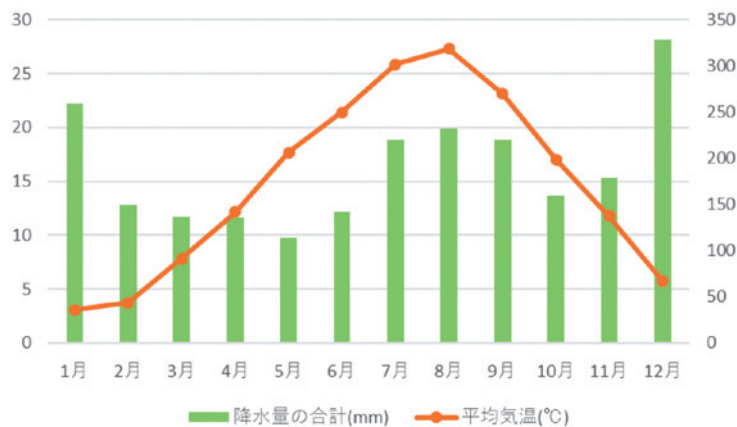


凡例	
H2_or	盛り土・埋立地・干拓地
Q33-H_sfd	扇状地・崖麓堆積物
H_sad	谷底平野・山間盆地・河川・海岸平野堆積物
H_svd	自然堤防堆積物
H_ssd	海岸・砂丘堆積物
Q32-33_std	段丘堆積物
Q31_std	段丘堆積物
Q22_std	段丘堆積物
Q1-21_sb	汽水成層ないし海成・非海成混合層
N1_sbc	汽水成層ないし海成・非海成混合層 礫岩
N1_sbs	汽水成層ないし海成・非海成混合層 砂岩, 砂岩泥岩互層ないし砂岩・泥岩
Q1-21_so	海成層
N2_soss	海成層 砂岩
N1_soss	海成層 砂岩
N3_som	海成層 泥石
N2_som	海成層 泥石
N2_soi	海成層 珪質泥岩
N3_son	海成層 石灰質シルト岩・砂岩
Pg4_vis_al	安山岩・玄武岩質安山岩 溶岩・火砕岩
N1_vas_al	デイサイト・流紋岩 溶岩・火砕岩
N1_vas_ap	デイサイト・流紋岩 大規模火砕流

高岡市周辺の地質図 【出典:産総研地質調査総合センター-日本シームレス地質図V2加工】

(3) 気候

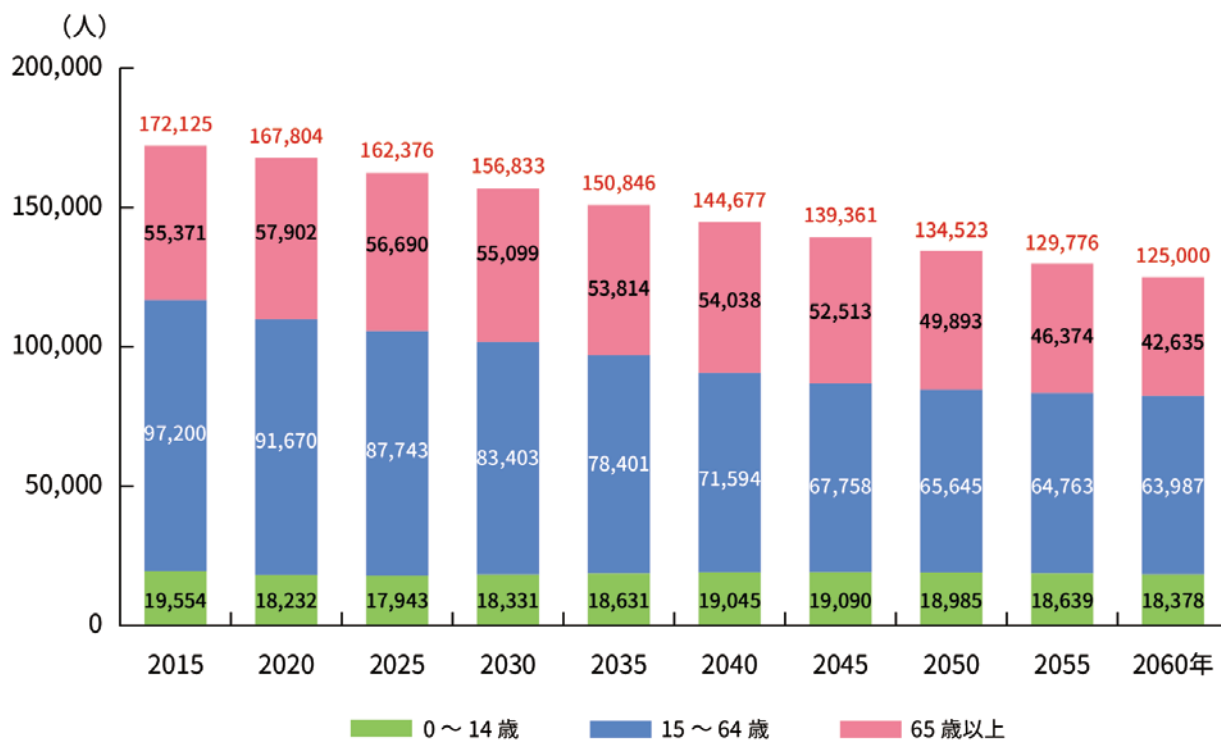
気候は日本海側気候に属する。北陸特有の曇天の日が多く、年間降水量は平均2,281mmであり、年間平均湿度は78.5%と高い。年間平均気温は14.7℃と比較的温暖であり、台風は少ない。夏期はフェーン現象により猛暑日となる日がある一方で、冬期には、暖流の対馬海流上で水蒸気を蓄えた北西の季節風が強く吹きつけるため、平野部で50cmの積雪を観測する年があるなど四季の変化がはっきりしている。



高岡市(伏木)の降水量及び気温の平年値 (2014-2023) 【資料:気象庁データを基に作成】

(2) 人口動態

高岡市の総人口は、昭和60年（1985）の188,006人をピークに減少傾向にあり、令和5年（2023）12月末の総人口は、164,053人となっている。年齢3区分別人口の推移では、昭和60年（1985）に対し令和2年（2020）は、15歳未満の年少人口が57.4%に減少、65歳以上の老年人口は2.3倍に増加、高齢化率は12.6%から34.6%（全国28.6%、富山県32.6%）に上昇しており、少子高齢化が進んでいる。このため、15歳から65歳未満の生産年齢人口が減少し、経済・産業活動の中心となる担い手が不足することで、経済活力の低下が懸念されている。また、人口減少・少子高齢化の進展は、地域の暮らしや文化を支えている地域コミュニティの維持を難しくさせていくことから、高岡市では、高岡市総合戦略「みらい・たかおか」を策定し、将来にわたって人口減少を克服し、地域の経済社会の活性化に向けて取り組んでいる。



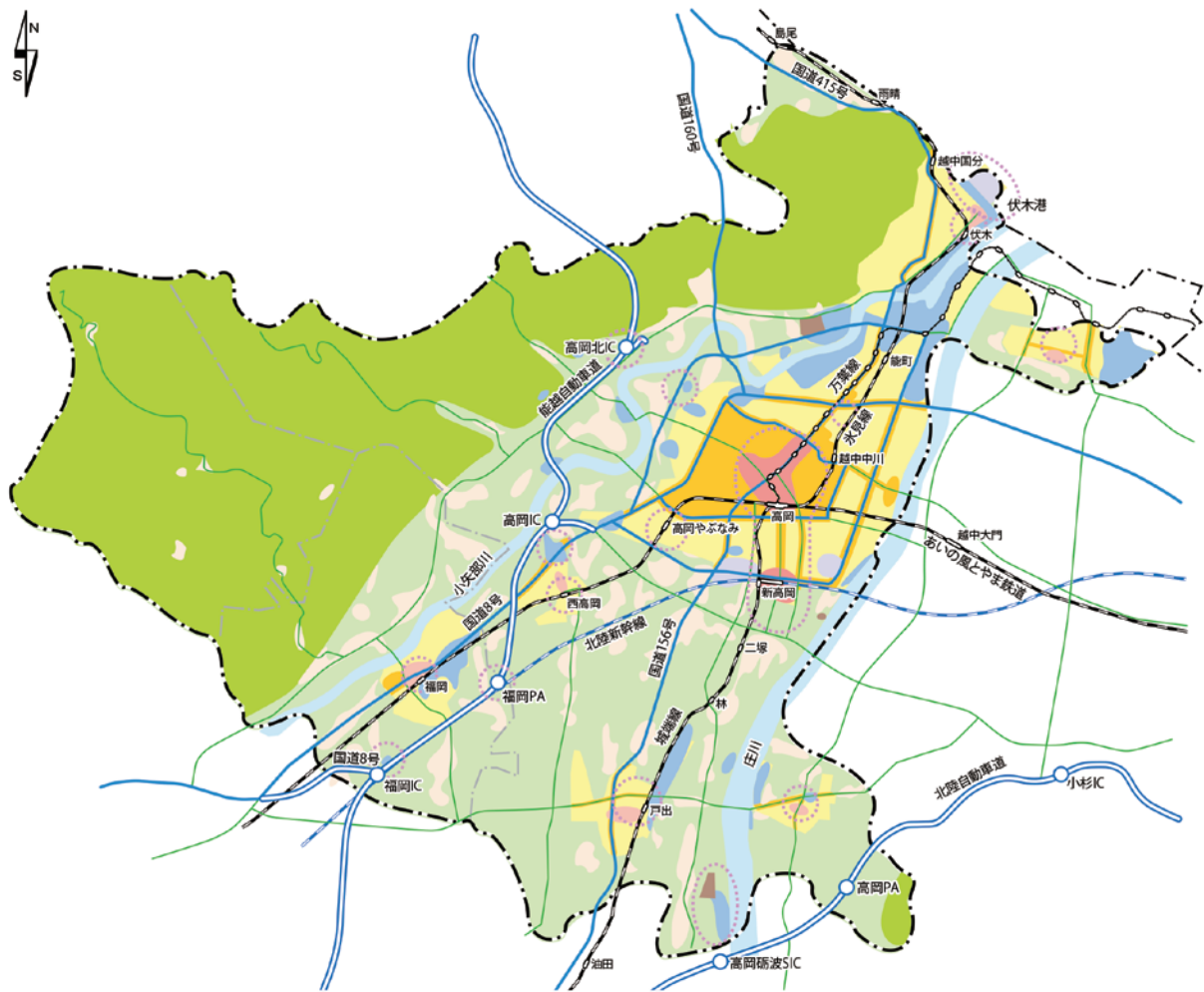
年齢3区分別の将来人口の推計 【出典：高岡市総合計画第4次基本計画】

(3) 土地利用

高岡市の市域面積209.58km²のうち、森林が67.04km²、耕地が53.20km²、宅地が37.82km²、その他51.52km²となっている。二上山から西山丘陵、宝達丘陵にかけて市域の3分の1が森林であり、耕地・宅地の多くは、小矢部川・庄川流域に広がっている。

高岡台地上には城下町として始まった高岡町に起源をもつ中心市街地が広がっている。そして小矢部川と庄川の河口に位置する伏木と高岡台地の間には工業地区が広がる。市の南部には戸出、中田、福岡など合併前の町の中心であった市街地があり、その周辺には農業振興地区と田園集落地区が広がっている。

高岡市総合計画は、歴史的な町並みや歴史的建造物の周辺では、歴史的風致の維持向上に配慮した土地利用の誘導や農村景観の保全、二上山や西山丘陵などの自然美を有する地域の保全と活用に取り組むこととしている。



凡 例		計画・開発促進地区
一般住宅地区	ゆとりある低層住宅を中心とする地区	計画・開発促進地区
複合住宅地区	住宅を中心に商業・業務の立地も許容する地区	
広域商業地区	市の中心的な商業地と高次都市機能が集積する地区	道路区分
生活商業地区	商業施設と身近な生活サービス施設が集積する地区	
工業地区	企業団地をはじめ工場等生産施設が集積する地区	高規格幹線道路
流通業務地区	流通業務関連施設が集積する地区	主要幹線道路 (環状放射道路)
産業支援地区	産業支援施設や研究開発施設が集積する地区	その他主な幹線道路
農業振興地区	優良農地を保全し農業の振興を図る地区	行政区域
田園集落地区	市街化を抑制しながら良好な集落環境を保全する地区	都市計画区域
自然環境保全地区	良好な自然環境の保全を図る地区	
河川		

土地利用概念図

(4) 産業

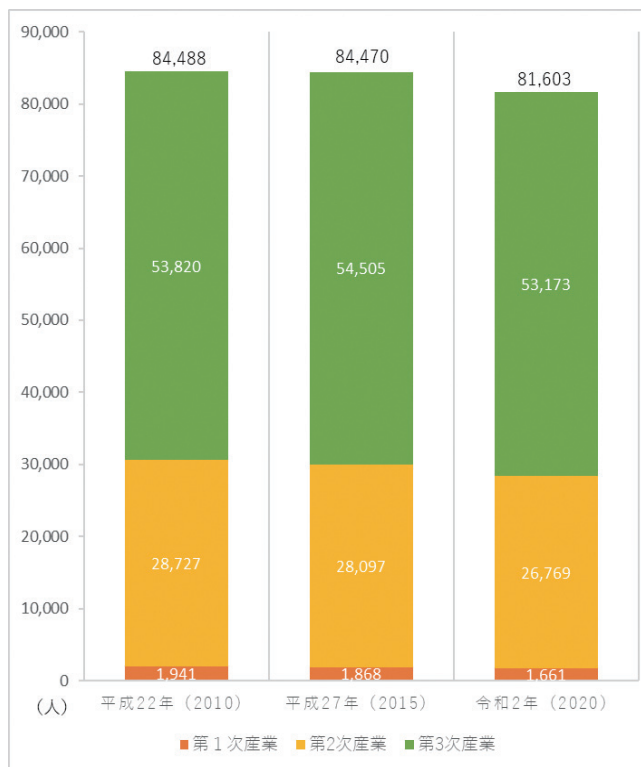
令和2年（2020）の産業別の就業者の割合は、第1次産業が約2%、第2次産業が約32%、第3次産業が約66%となっている。平成22年（2010）と令和2年（2020）を比較すると第1次産業の就業者が約15%、第2次産業の就業者が約7%減少している一方で第3次産業の就業者数はほぼ横ばいとなっている。

第1次産業の約92%が農業であり、農業就業者の約65%が65歳以上となっている。また、副業として農業をしている割合は全体の95%を占めている。農業産出額の70%以上が米であり、県内平均より高い。

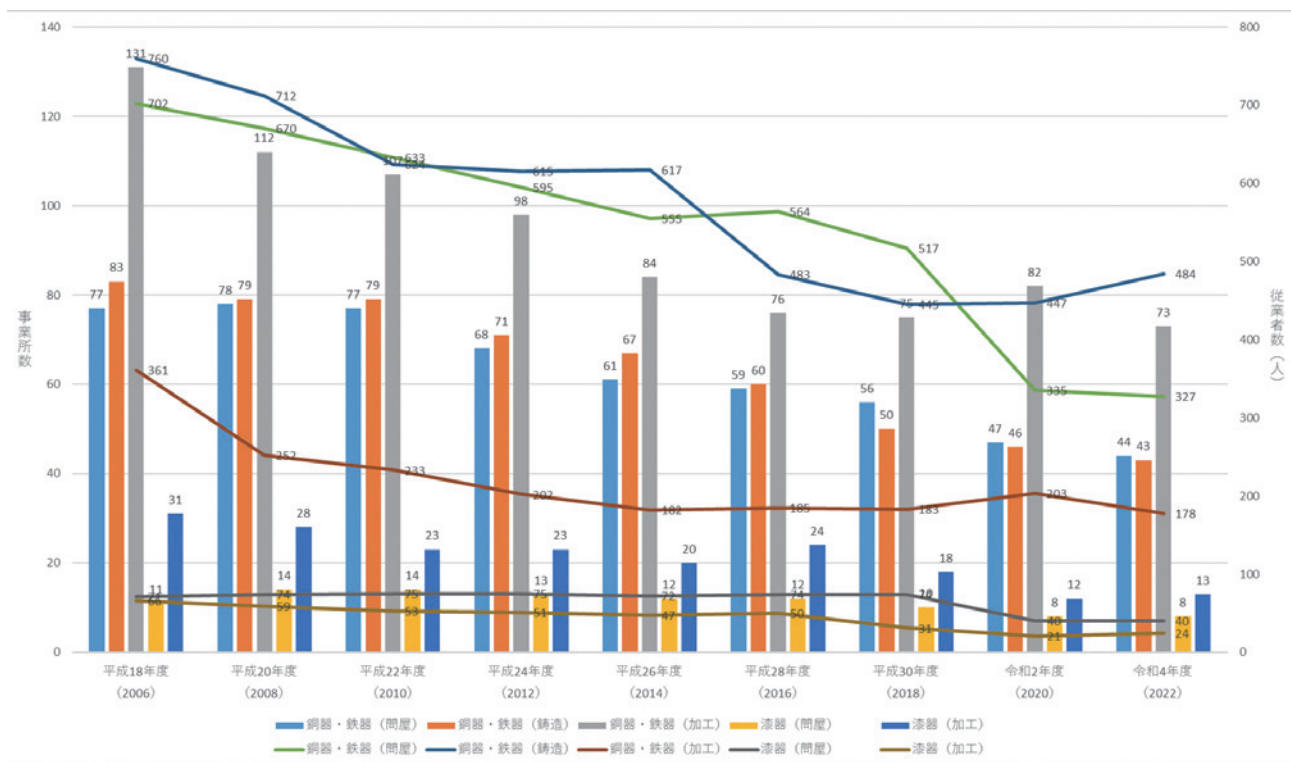
第2次産業は、近世に由来する銅器・漆器・捺染などの伝統的な産業が盛んであったこともあって製造業が約76%を占めている。産業別の事業所数で見ると、銅器を含む金属製品が多く、3分の1以上の割合となっている。伝統的な鋳物技術を基に、豊富な水資源と安価で安定した電力供給を背景として昭和初期から発展してきたアルミニウム産業は市を代表する産業となっている。

また高岡銅器、高岡漆器、越中福岡の菅笠は伝統的工芸品の指定を受けている。高岡銅器は、製造・加工部門において工程別の分業体制が確立されているほか、従事者数が少ない規模が小さな事業所が多く、他の産地に比べて集積度が高い点が特徴である。近年は、錫製品や着色技術を活かした服飾、鍛造ホイールなど製造・加工業者が自ら商品を企画し、国内外に販路を開拓する動きがみられる。製造業の就業者数は減少してきているが、高岡銅器の加工業や漆器、菅笠など伝統産業では従業者の高齢化が特に進み、後継者の確保と育成が求められている。

第3次産業は、卸売業・小売業が25%、医療・福祉が約20%を占めている。卸売業・小売業は減少しているが、医療・福祉などが増加しており、第3次産業の就業者数は横ばいとなっている。



産業別就業者数 【資料:国勢調査】

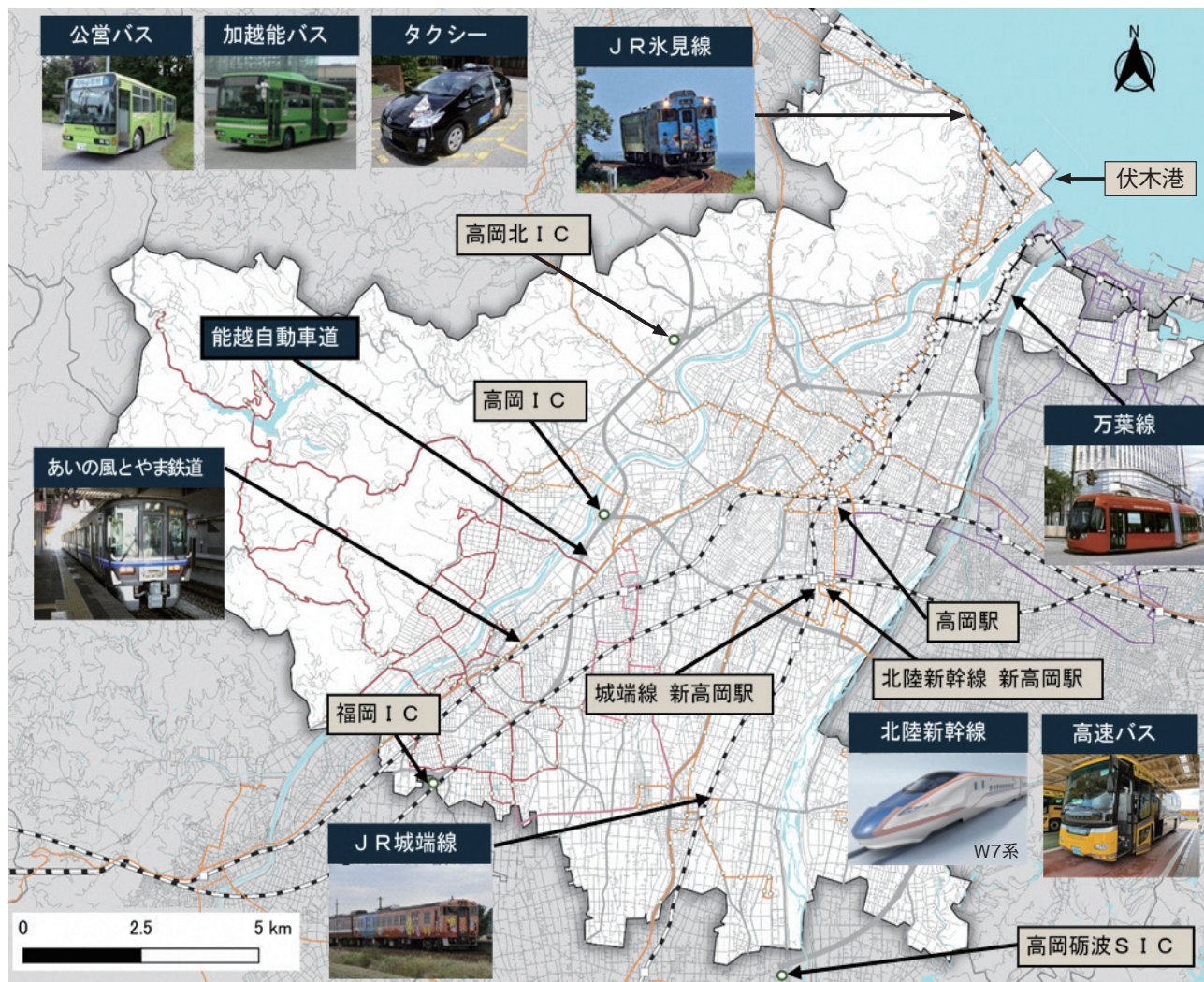


伝統産業(銅器・鉄器・漆器)の事業所数と従業者数 【資料:高岡特産産業のうごき】

(5) 交通

東西方向に結ぶ北陸新幹線、北陸自動車道、南北方向に結ぶ東海北陸自動車道と能越自動車道による広域交通ネットワークが交差し、総合的拠点港である伏木富山港を有する日本海中央部の「扇の要」に位置している。東京、大阪、名古屋の3大都市圏からの所要時間は、いずれも電車で約2時間30分とアクセスしやすくなっている。新高岡駅や毎年クルーズ船が寄港する伏木港は、国内外から多くの方が訪れる拠点となっている。

地域交通は、高岡駅を中心とした鉄軌道による交通軸が形成されている。東西はあいの風とやま鉄道、南部はJR城端線、北部はJR氷見線や路面電車である万葉線が運行し、高岡駅や新高岡駅を起点として路線バスが放射状に運行している。また、タクシーによって市内全域に交通サービスが提供されている。



高岡市内の公共交通ネットワーク図 【出典:高岡市地域公共交通計画】

(6) 観光

市内の観光地としては、国宝瑞龍寺や国宝勝興寺といった歴史を持つ社寺をはじめ、山町筋や金屋町、吉久の伝統的建造物群保存地区、高岡城跡や銅造阿弥陀如来坐像（高岡大仏）など市内の指定等文化財のほか、万葉の時代からの景勝地である二上山や雨晴海岸が挙げられる。また、高岡御車山祭や伏木曳山祭などの祭礼行事や高岡万葉まつり（万葉集全二十巻朗唱の会）、福岡町つくりもんまつりといったイベントに市外からの観光客が訪れている。

近年は、「ものづくりのまち」として高岡銅器・高岡漆器・越中福岡の菅笠など伝統的工芸品の販売だけでなく、鋳物製作や銅器の着色、螺鈿細工など伝統産業を身近に体験できる工房や施設が市内に点在しており、重要な観光資源となっている。

令和元年（2019）に高岡市を含めた6市の行政と約80の企業・団体が連携して、観光づくり地域法人として（一社）富山県西部観光社水と匠が設立（令和3年（2021）に地域連携DMOの認定）している。同社では市内の瑞龍寺・勝興寺・国泰寺という宗派の違う3つの大寺院と伝統的なものづくりを結び付けた体験ツアー商品を造成するなど、旅行商品の開発などを通じた地域活性化に取り組んでいる。

（7）文化財施設

市内には、文化財等の保存・活用に関係する施設として高岡市立博物館や高岡市万葉歴史館、高岡御車山会館などがあるほか、武田家住宅など市が所有する指定等文化財を公開・活用している。市所有以外では、菅野家住宅や佐伯家住宅において公開が行われている。

市が所有する文化財施設については次のとおりである。

ア 高岡市美術館 [運営：(公財)高岡市民文化振興事業団（指定管理）]

昭和26年（1951）に創設された旧美術館を前身とし、高岡の伝統工芸である金工や漆芸の作品を中核に幅広く美術・工芸の作品を収集・展示している。

イ 高岡市立博物館 [運営：(公財)高岡市民文化振興事業団（指定管理）]

高岡の歴史・民俗・伝統産業に関する資料の収集保存、調査研究、展示、教育普及に関する活動を行っている。原始から近代までの通史、高岡銅器、高岡漆器などの伝統産業、獅子舞や高岡御車山などの祭礼、高岡市出身で業績を残した人たちを紹介する展示をしている。また、高岡城跡内にあり、城跡のガイド機能を担っている。

ウ 高岡市福岡歴史民俗資料館 [運営：高岡市]

越中福岡の菅笠をはじめとして福岡地域の埋蔵文化財や古文書、民俗資料を中心に歴史資料・民俗資料の保管・展示している。建物は菅笠商人として財を成した寿原氏の寄贈を受けたもので国の登録有形文化財となっている。

エ 高岡市万葉歴史館 [運営：(公財)高岡市民文化振興事業団（指定管理）]

万葉集を中心テーマに据えた日本で初めての研究施設。万葉集と万葉の時代に関し、広く資料・文献・情報類の収集。調査・研究を行い、その成果を展示、出版している。

オ 高岡市鋳物資料館 [運営：金屋町自治会（指定管理）]

高岡鋳物発祥の地である金屋町において400年にわたる鋳物産業の歴史、民俗資料を収集・展示している。指定管理者として地元の住民が管理運営している。

カ 高岡市高岡御車山会館 [運営：高岡市]

高岡御車山祭で巡行する高岡御車山を通年展示する施設。400年以上の御車山の歴史の紹介や、祭の準備から祭礼当日を追体験できる映像などのほか、御車山に凝縮された「ものづくりのまち高岡」の工芸技術を紹介している。

キ 高岡市埋蔵文化財センター [運営：高岡市]

市内で出土した埋蔵文化財の展示を通じた高岡の歴史の紹介、勾玉づくりや組みひもづくりなど体験学習を行っているほか、埋蔵文化財の保管・整理作業を行っている。

ク 武田家住宅 [運営：高岡市]

武田家は武田信玄の弟逍遙軒信綱しやうようけんのぶつなの子孫と伝えられ、建物は18世紀末に建てられた豪農の住居でこの地方における江戸後期の農家建築の特色をよく残しているとして重要文化財に指定されている。平成元年（1989）に所有者から市に寄付され、武田家が所蔵していた資料とともに一般公開している。

ケ 高岡市伏木北前船資料館 [運営：伏木観光推進センター（指定管理）]

廻船問屋であった旧秋元家住宅（市指定）を活用し、伏木と周辺の村々の歴史、古地図や引札、船主の生活道具など、北前船に関する資料を展示している。

コ 高岡市土蔵造りのまち資料館 [運営：株式会社はんぶんこ（指定管理）]

高岡屈指の商家であった旧室崎家住宅（市指定）を活用した施設。令和5年度（2023）から株式会社はんぶんこにより、内部の公開だけでなく伝統建築に関する知識や伝統工芸の技術を学ぶワークショップなどが開催されている。

サ 高岡市伏木気象資料館 [運営：伏木観光推進センター（指定管理）]

国内最初の私立測候所に起源をもつ旧伏木測候所（国登録）であり、伏木における気象観測の歴史や気象観測機器などを展示している。

シ 高岡市デザイン・工芸センター [運営：高岡市]

伝統産業に受け継がれてきた技術の保存・継承と発展を図るとともに新たなクラフト産業創出を目指し、新商品開発やデザイン開発の支援を行っている。また、伝統工芸産業人材養成スクール事業や伝統工芸産業技術者の表彰、伝統工芸品展の開催などを行っている。

ス 高岡地域地場産業センター [運営：（公財）高岡地域地場産業センター]

富山県西部地域の地場産業の振興と地域の発展に寄与するとともに、広く県内外に地域の産業を紹介している。鋳物と漆器加飾の体験教室のほか、高岡地域文化財等修理協会の活動に対する支援を行っている。

3 歴史的背景

(1) 原始

高岡市域には、約3万年前から人々が暮らしていた。原始の遺跡は、小矢部川の左岸、特に二上山麓と西山丘陵の縁辺や佐野台地、高岡台地に多く分布する。これらは豊かな水資源を確保でき、河川氾濫が少ない狩猟・漁労・採集生活を営むための安定した土地であった。次第に生活が豊かになり、ムラの形成がみられ、集落の中に階層の分化が進むと、有力な集落を核とした地縁集団が形成された。その中心的指導者が豪族や首長へと成長していき、富山県西部における中核的な集落を形成した。

●旧石器時代から縄文時代へ

氷河期の人々は厳しい自然の中で、拠点を持たず、ナウマンゾウなどの大きな哺乳類を追いかけるような生活を営んでおり、市内から当時のナイフ形石器等が出土している。氷河期が終わり、温暖な気候になると、氷河が溶け海面が上昇し、寒い気候に適していた大型の動物が減少した。人々は高岡台地や西山丘陵沿いなど氾濫が少なく安定的な土地でかつ、水が豊富に確保できる場所で集落を形成し、定住化を図った。また、縄文時代には、新たな道具である土器を作り、狩猟・漁労・採集生活の内容が豊かになった。



旧石器(岩崎遺跡と岩崎御庭先遺跡出土)

●弥生時代のはじまりと稲作

紀元前3世紀、大陸から北九州に伝わった稲作は、弥生中期には富山県域に伝わった。扇状地の末端や微高地・自然堤防上に集落が立地し、近辺の沼沢地や河川流域の低湿地で水田耕作が営まれた。金属の道具も使うようになる。稲作により食料供給が安定する一方で、集落の中に身分の差が広がり、やがて有力な集落を核とした地縁集団が形成され、その中心的指導者が豪族や首長へと成長していった。



縄文土器(小竹藪遺跡出土)

●管玉づくり

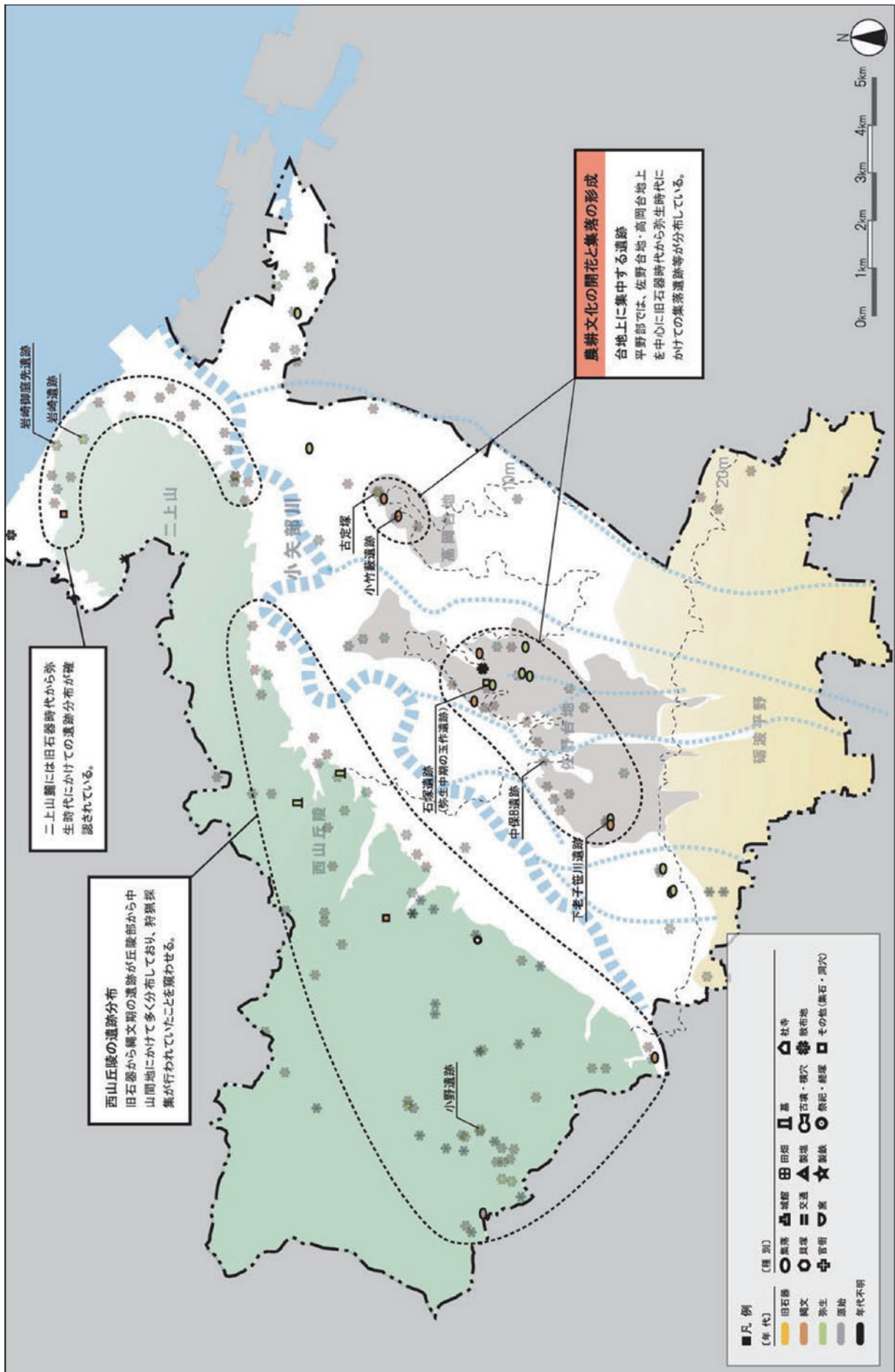
佐野台地に立地する弥生時代の石塚遺跡や下老子笹川遺跡からは、管玉や勾玉の完成品や製作過程の品に加え、緑色凝灰岩のほかヒスイ・石英・瑪瑙・琥珀などの石材や、石針・石鋸など製作用の石器が出土し、玉作工房があったことが確認されている。管玉や勾玉には、当時の先進地域である山陰・北近畿と同様の製作技法が用いられ、高い技術力が見られる。高岡のものづくり文化のはじまりといえる。



石塚遺跡(弥生土器)



下老子笹川遺跡(管玉生産資料)



原始の歴史概要図

(2) 古代

弥生時代の拠点的集落による生活からやがて豪族・首長層による社会が形成され、北陸には「越」と呼ばれる政治権力と領域（クニ）が生まれた。その後、畿内^{きない}で成立したヤマト王権は、在地有力層^{くにのみやつこ あがたぬし}を国造や県主に任じ、地方支配を進めた。「越」のクニも伊弥頭国造^{いみずのくにのみやつこ}が置かれ、その支配に組み込まれていく。畿内から広まった古墳文化は高岡市域にも伝わり、二上山麓・西山丘陵には古墳や横穴墓^{よこあなぼ}が作られた。

奈良時代になると律令制度^{りつりょう}が確立されて越中国が成立する。伏木台地には、政治の拠点である国府が置かれ、古代越中の政治や文化の中心地、海陸運送の拠点として機能した。国府の長官である越中国守として最も有名なのは、天平18年（746）から5年間赴任した大伴家持^{おおとものかもち}である。家持は当時の国家事業であった東大寺建立を支える荘園の確保の任を請け、越中の広大な穀倉地帯に荘園の選定・確保に努めるなど中央集権体制^{せいち}の強化を図った。

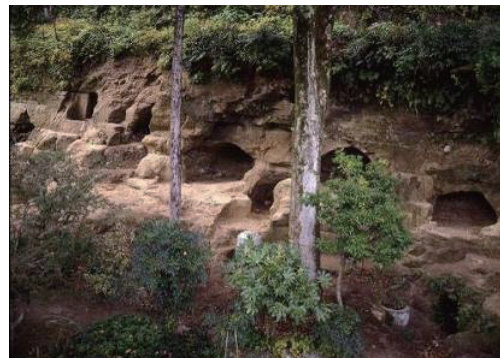
●二上山麓・西山丘陵の古墳と横穴墓群^{ちくぞう}の築造

古墳は、3世紀後半から7世紀にかけて、日本各地で築造された権力者の墓である。小矢部川流域は県内でも屈指の古墳集中地帯であり、当時この地域の人口が多く、栄えていた証である。また、6世紀後半から8世紀初頭は西山丘陵を中心に山腹に横穴を掘って墓を作る横穴墓が築かれた。

氷見平野と伏木台地の間の海を見渡せる高台にある桜谷^{さくらだに}では、史跡に指定された2基を含め、4世紀後半から5世紀後半を通じて10基以上の古墳が築造されており、大陸や畿内との関係を示す金具や鉄銚^{てつしほこ}が出土している。日本海を舞台に広大な交易圏を形成する海人集団が存在したことを示している。



桜谷古墳



江道横穴墓群

●大伴家持と越中万葉

大伴家持は、『万葉集』の編纂に重要な役割を果たした歌人で、天平18年（746）から天平勝宝3年（751）まで国守として越中の国府に滞在した。その5年間に詠んだ家持自身の歌223首を含め、越中に関わりのある歌337首が家持の歌日記の形で『万葉集』17-19巻に収められており、「越中万葉^{えちゅうまんよう}」と呼ばれている。その内容は、二上山や雨晴海岸などの越中の自然景観や、国守の職務に関わるものなど多岐にわたり、当時の自然環境や地方政治の一端を今に伝える貴重な資料となっている。



大伴家持像



越中国庁跡



万葉歌碑

家持越中巡行推定図
『第六回企画展 越中国と万葉集』
高岡市万葉歴史館／平成21年より

●古代の官道と官衙

中央集権的な国家を維持するため、律令制度によって都と国府を結ぶ駅路が整備された。『延喜式』に記される古代の官道の1つである北陸道には、越中国内に西から坂本（小矢部市埴生付近）—川人（福岡町赤丸付近）—日理（高岡市伏木）—白城—磐瀬—水橋—布勢—佐味の8駅があった。坂本駅より小矢部川左岸の微高地上を北上し国府に向かうコースをたどるが、途中、川人駅を経て日理駅辺りで渡河し白城駅へ向かったとみられる。なお、この小矢部川左岸のルートは、近世以降の北陸道と区別するため、山根道と呼ばれる。また、海沿いに能登国から越中国を結ぶ海浜道は、北陸道の支道として越中国府のある伏木、守護所が置かれた放生津、能登を結ぶ道として重要な役割を果たした。

また、佐野台地の東木津遺跡からは木工や漆工などの工房跡が見つかっており、同じく中保B遺跡では、倉庫群の跡が見つまっている。両遺跡とも船着き場遺構が確認されており、千保川や祖父川によって伏木台地に通じていた。

●古代仏教の伝来

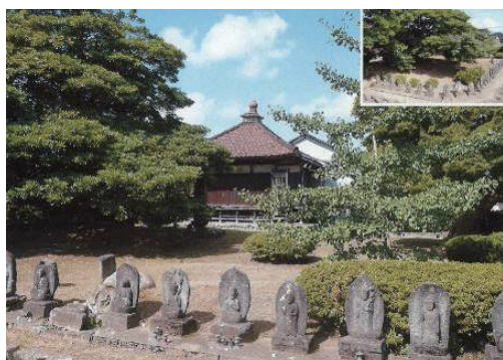
渡来人が伝えた仏教は、巨大な瓦葺き建物や高層の塔、金色に輝く仏像など、異国の最新知識や最先端の技術を伴っていた。豪族は、古墳に代わる権威を示すものとして、競って一族のための氏寺を建立した。7世紀中ごろ、伏木台地には寺（御亭角廃寺）があったことが確認されており、その瓦は射水丘陵で生産されたものが用いられている。伊弉頭国造の末裔と言われ、当時の越中の豪族を統括していた射水臣による建立と考えられている。

天平13年（741）、聖武天皇は、国分寺建立の詔を発し、奈良の都に東大寺、全国に国分寺を整備させ、仏教の力によって飢饉や天然痘の大流行で疲弊していた国家の安寧を図ろうとした。天平20年（748）に国師（国分寺造営に関して選地等の実務を担った）に付き



御亭角廃寺で使用された瓦

従う僧であった清見の送別会を催したことが、大伴家持の詠んだ歌から確認でき、越中国分寺の造営時期を示している。現在、伏木一宮にある国分寺には、平安時代の等身大の仏像が2体伝わっており、往時の壮大さを感じさせている。



越中国分寺跡



越中国分寺に伝わる仏像

● ^{ふたがみしん}二上神と古代信仰

古代の人々は自然環境や自然現象に人力が及ばない霊力を感じ、神と崇めた。延長5年（927）にまとめられた『延喜式』神名帳に記される神社（式内社）は市内に8座ある。中でも射水神社は、古くから神山として崇敬された二上山の二上神と一体と考えられ、古代越中国で最高の神階に昇っている。二上射水神社の春の例大祭である築山行事は、天上から神を迎えることや神と山を同一視するなど古代信仰の姿を今に伝えており、高岡御車山の原初形態といわれている。また、同じく式内社で二上山麓に位置する氣多神社は、越中国一宮と伝えられている。本殿は永禄年間（1558～1570）の再建と言われ、重要文化財に指定されている。鎌倉時代の作とされる躍動感と重量感あふれる木造狛犬が伝えられており、当時狛犬にふさわしい社殿が備わっていたと考えられる。春の例大祭において奉納する「にらみ獅子」は行道形式の御祓い獅子であり、古い獅子舞形式を知る上で貴重な事例である。



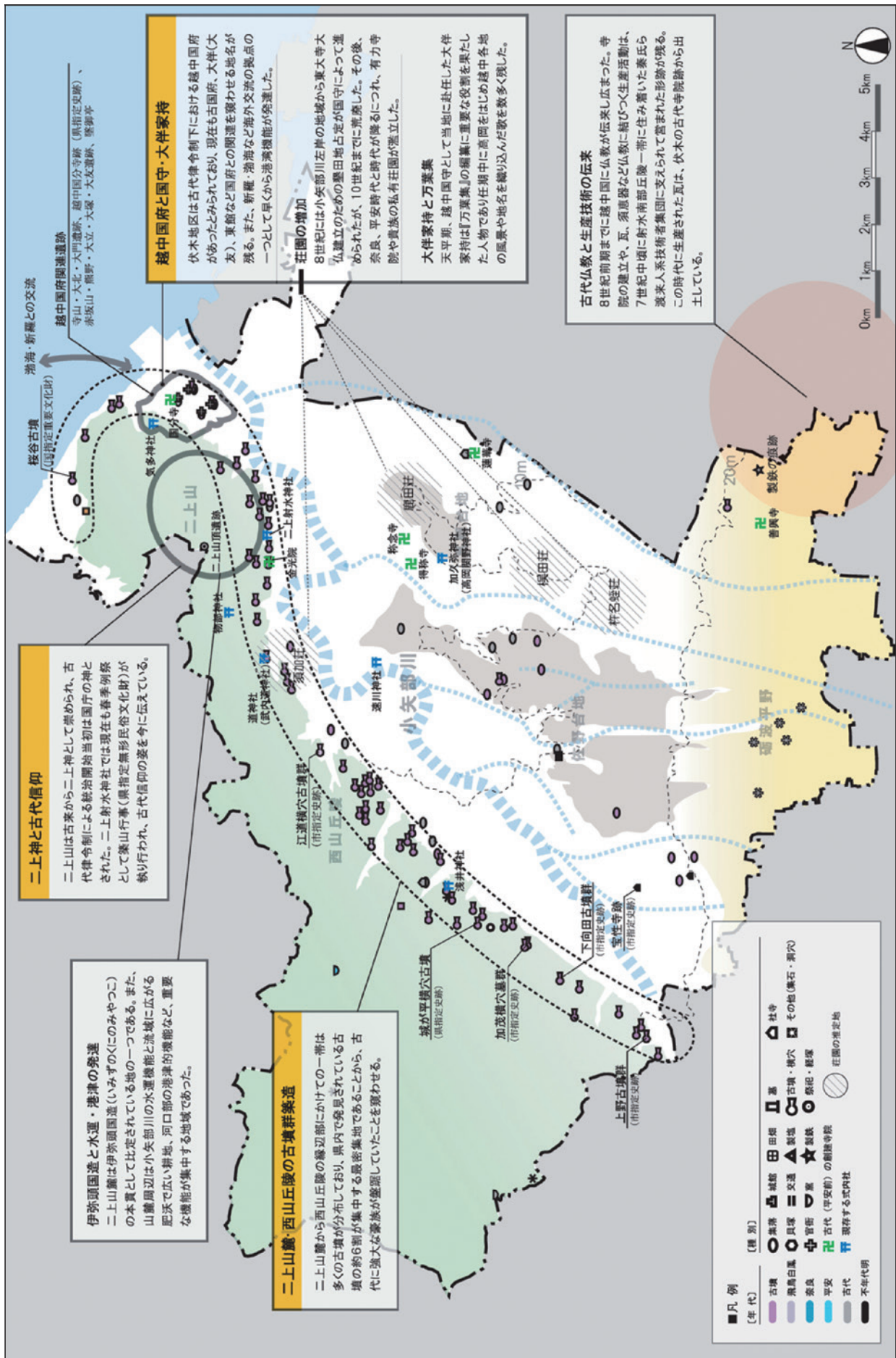
二上山



二上射水神社築山行事の一環
源太夫獅子



氣多神社本殿



古代の歴史概要図

(3) 中世

平安時代の後半になると、朝廷は国の統治を国司に一任したため、国府の機能は縮小して国庁は国衙と呼ばれ、国務は国司の館で行われるようになった。鎌倉時代になると気候変動によって海面が下がって伏木の港湾機能が低下し、守護所など政治の中心は放生津（射水市）に移った。砺波平野と伏木・放生津を結ぶ小矢部川左岸は、政治的な混乱により度々戦禍を被ったが、多くの寺院が建立されるなど引き続き越中の大動脈であった。

南北朝の動乱など争いが絶えない状況の中で街道や水路の要衝に自然の地形を活かした城が築かれた。それらはやがて大規模化し、守山城や木舟城などに城下町が整備された。このような混沌とした時代背景において、人々は仏教を強く信仰するようになり、支配者層だけでなく民衆にまで広まっていった。

●源平の争乱、南北朝の動乱、越中大乱

平安時代末に起きた源氏と平氏の戦いは、越中の武士も巻き込み各地で動乱が起きた。寿永2年（1183）、木曾義仲は越中国府で軍勢をまとめ、俱利伽羅峠で平維盛を破った。平氏滅亡後、源頼朝に追われた源義経は雨晴海岸を通り、奥州藤原氏を頼って平泉へ向かったと言い伝えられている。

元弘2年（1332）、後醍醐天皇の討幕計画が失敗し、隠岐に流されると、越中に恒性皇子が流され、二塚に幽閉された。翌年、足利高氏が京都の六波羅探題を襲撃するなど鎌倉幕府の敗色が濃くなり、恒性皇子は、越中守護の名越時有に殺害された。二塚にある皇子の墓所は富山県内唯一の御陵墓となっている。

南北朝時代に入ると、後醍醐天皇の皇子で各地を転戦していた宗良親王が、興国3年（1342）に越中に入り、放生津に近い牧野に館を建て、南朝方の勢力拡大を図ったが、やがて信濃へ移った。



「俱利伽羅合戦図屏風」(部分)

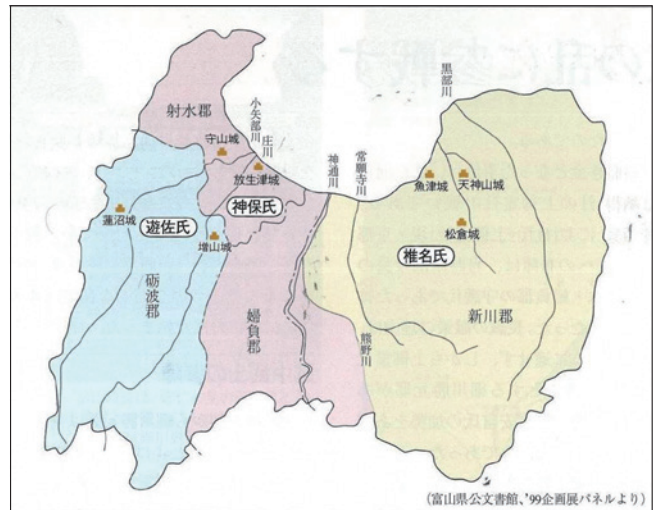
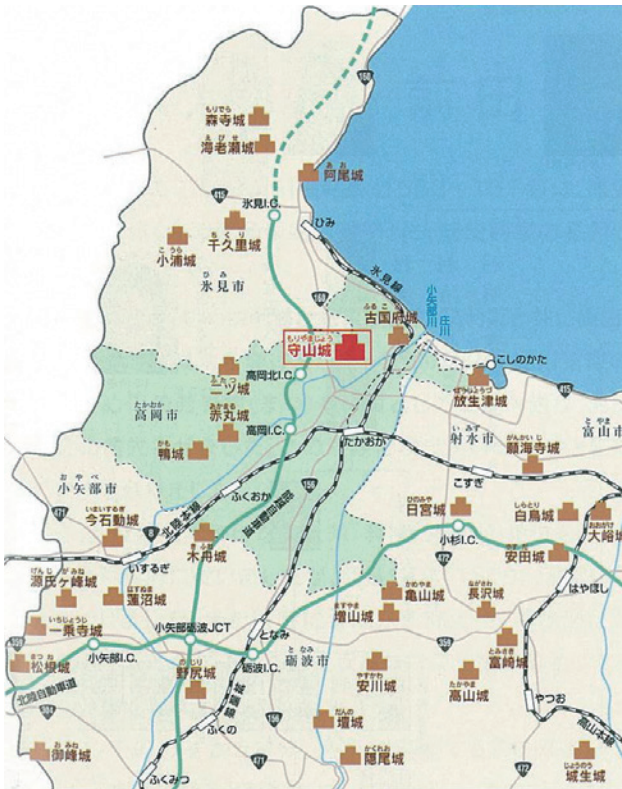
『源平盛衰記』によると、義仲は牛の角に松明を付けて敵陣へ突入させる「火牛の計」をとり、平氏軍を谷底へ転落させたといわれている。
(倶利伽羅神社蔵) (津幡町教育委員会提供)

源平・南北朝時代の高岡市周辺の歴史マップ

『高岡市立博物館常設展ガイドブック』 高岡市立博物館／平成20年より

南北朝時代後期には南朝の桃井直常と越中守護の斯波氏が五位庄など越中各地で激しく争った。度重なる戦火により放生津が灰燼に帰したため、守山に守護所が置かれた。応仁の乱の後には、畠山氏が越中守護につくが、越中は神保氏、遊佐氏、椎名氏の守護代によって分割統治された。射水郡と婦負郡を支配した神保氏が有力であったが、3氏は勢力を争い、支配は安定しなかった。

その後、戦国大名が台頭すると織田勢と上杉勢が越中を巡り争い、天正10年（1592）の本能寺の変以後は、羽柴（豊臣）秀吉の天下統一の過程で、加越能国境が前田氏と佐々氏の争いの場となった。秀吉の天下統一によって越中は前田家の領有となり、ようやく社会が安定した。



三守護代分治図

『富山歴史館』 富山新聞社／平成13年より

高岡市域と周辺の山城位置図

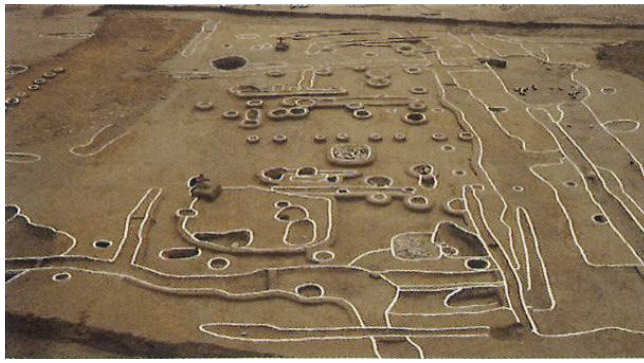
『高岡市立博物館常設展ガイドブック』 高岡市立博物館／平成20年より

● 経済・交通の発達

鎌倉時代は、新しい土地の開墾だけでなく、ため池や水車の利用など農業の生産力向上が図られた。生産力が向上した室町時代には、商業が発達して行商人が行き交い、流通が活発となった。社寺の門前や交通の便利な場所において、毎月決められた日に開かれる定期市が開かれた。このため、馬借など運送業のほか様々な職業が登場し、農具や刀を作る鍛冶や鋳物業も盛んとなった。

中世における北陸道の主要なルートは、蓮沼（小矢部市）から放生津（射水市）までの舟運と海浜道が直結したものであった。小矢部川左岸には現在、三日市（西五位）、六日市（石堤）、十日市（同）、四日市（同）という集落が並んでおり、定期市が開催されていた名残である。また、俱利伽羅峠を越えて今石動—木舟—戸出—中田—水戸田（射水市）と結び、越中の平野をほぼ最短距離で横切る戸出・中田往来は、重要な道であった。小矢部川との交差する地点には木舟城が築かれ、城下町が広がるなど中世末には戸出・中田往来が北陸道の主流となった。

木舟城下町は、鍛冶に関係した炉跡をはじめ、炉壁・鍛冶滓などが出土しており、鍛冶師・鋳物師が活躍した職人の町であった。また、五位庄の三日市には大和国宇多郡の刀工宇多一派が移り住んだ。宇多派の刀剣類は秀作が多く、加賀藩で珍重された。般若郷の金屋（戸出）の鋳物師は高岡に招かれて高岡鋳物を興している。



開發大滝遺跡



木舟城跡出土遺物



槍 銘 宇多 勝国

● 禅宗の隆盛

中世は仏教が高岡市域の各地に浸透した。浄土宗が国衙の官人を經由して広まり、その後浄土宗の流れを組む時宗が広まっていった。越中における時宗の教化は、正応5年（1292）の二祖と称される他阿によって行われた。港湾や宿などの交通を重視し、舟運を活用した時宗は放生津周辺から小矢部川流域に広まった。放生津は越中における時宗宗徒の拠点になり、海上交易にも進出して放生津の経済的発展の原動力となった。

南北朝時代以降、越中の支配層の宗教は主に禅宗であった。臨済系禅宗では、密教色の濃い法燈派が越中に進出し、放生津の興化寺は、守護である斯波氏や畠山氏の外護を受けて発展し、二上山中には国泰寺（臨済宗国泰寺派大本山）が開かれた。また、越中における最初の曹洞宗寺院は、手洗野にある信光寺である。畠山氏が越中守護となり、その守護代として放生津に神保氏が入った後の文明10年（1478）頃、信光寺は神保氏の外護を受けるようになった。このように、禅宗寺院等は守護大名の外護を受けて布教を広め、発展していった。



国泰寺(臨済宗寺院)



信光寺(越中で最初の曹洞宗寺院)

● 勝興寺と一向一揆の争乱

富山県は「真宗王国」と呼ばれ、浄土真宗寺院が多い地域である。勝興寺は浄土真宗が畿内から北陸へと教線を広げていく中で、拠点となった寺院である。勝興寺の歴史は、浄土真宗中興の祖とされる本願寺8世蓮如が、文明3年（1471）に北陸布教の途中で営んだ土山坊（南砺市）に始まると伝わる。

浄土真宗は「一向宗」とも呼ばれ、室町時代後半には門徒衆による一向一揆が起きた。越中門徒は、はじめ加賀門徒の指導者である本泉寺蓮悟（蓮如7男）に従ったが、加賀一向一揆同士の内紛、大小一揆（享祿の錯乱）をきっかけに、勝興寺と瑞泉寺（南砺市）に率いられるようになった。勝興寺は先の内紛で本願寺側に味方したことで、教団内部でも重要な地位を占めるようになった。

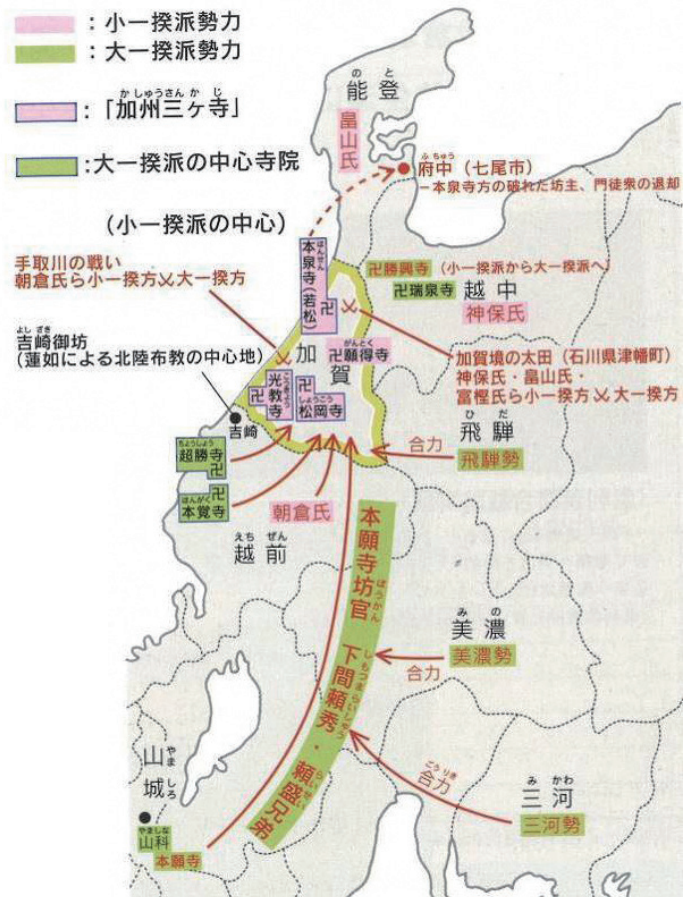
戦国大名に比肩する勢力となった本願寺は、天下統一を目指す織田信長に対抗し、勝興寺や瑞泉寺は、本願寺派として織田勢と抗争を繰り広げた。

伏木古国府における勝興寺の歴史は、天正12年（1584）、越中を治めていた佐々成政の配下である守山城主神保氏張が、勝興寺に「府之分一円」を寄進することにはじまる。成政は、東海地方で勃発した小牧・長久手の戦いと連動して、加越能国境で羽柴秀吉方の前田氏と抗争を開始する。前田氏との戦いに敗れた成政は、秀吉に対抗するため勝興寺に古国府の土地を寄進し、越中一向一揆の勢力の懐柔を図った。その後、成政は秀吉に降伏するが、秀吉、前田氏も勝興寺に禁制を与え、寺の治安と権利を保障した。

本願寺が東西に分裂すると勝興寺は、西本願寺派における越中の代表寺院となり、前田氏と関係を深め、やがて加賀藩の越中統治の仕組みに組み込まれていく。

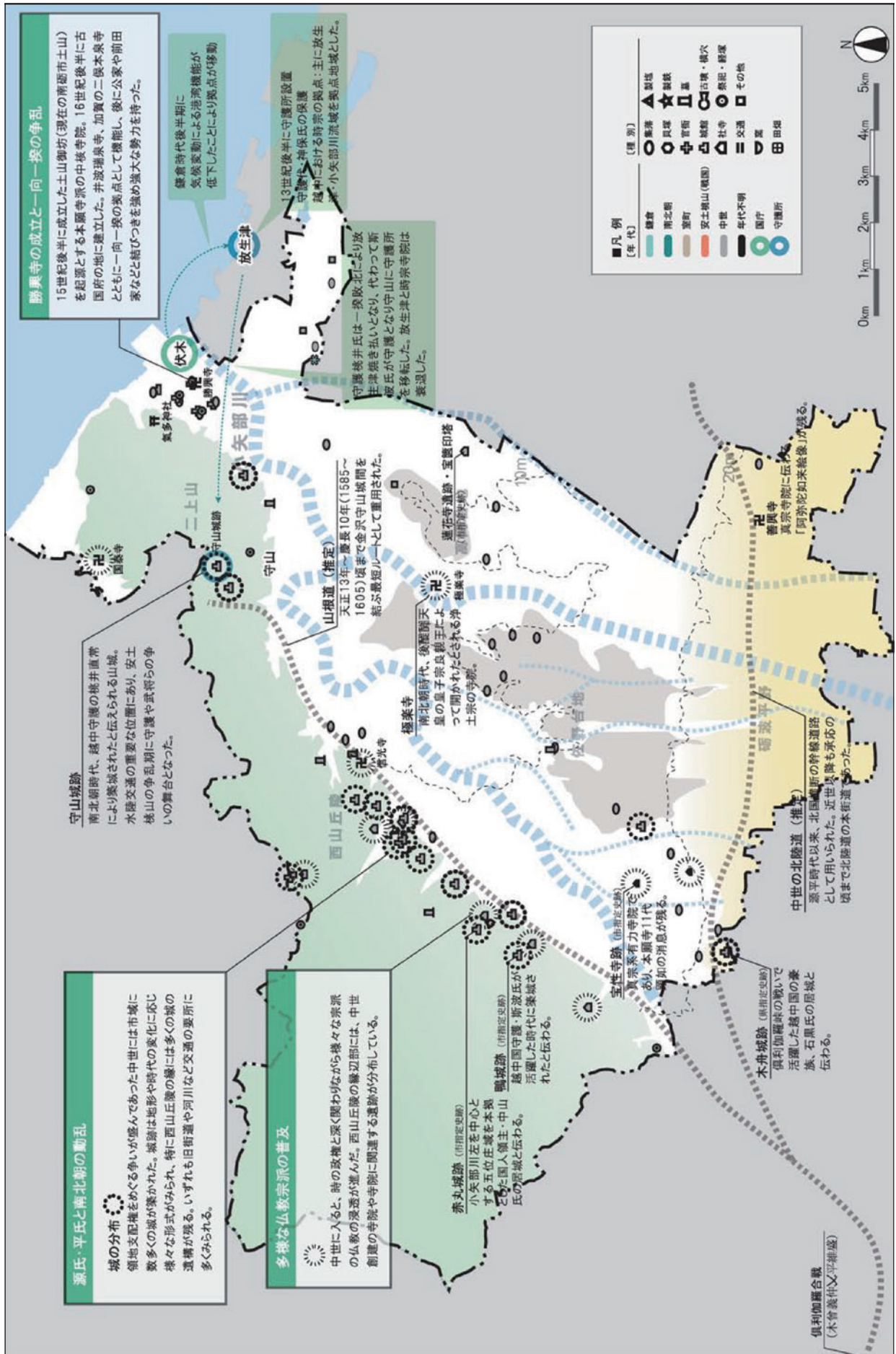


勝興寺移転図 (年代は創建された年)



享禄4年(1531)時の大小一揆(享禄の錯乱)勢力分布図

『高岡市立博物館常設展ガイドブック』 高岡市立博物館／平成20年より



中世の歴史概要図

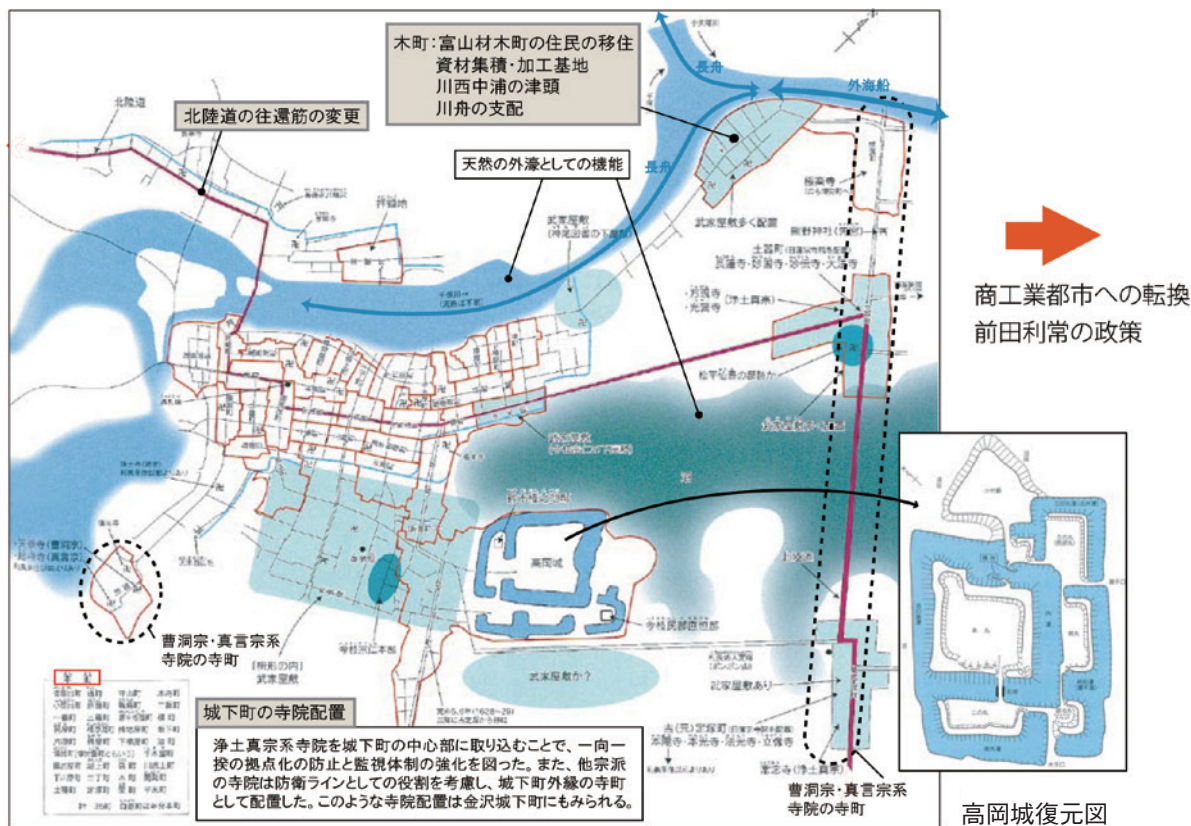
(4) 近世

関ヶ原の戦いののち、前田氏は加賀・能登・越中の3国を治めることとなった。加賀前田家2代当主の前田利長は、慶長10年(1605)、異母弟の利常に家督を譲り隠居した。しかし、実権は持ち続け、慶長14年(1609)、3国を治める適地として高岡台地に高岡城を築造し、城下町を整備した。しかし、5年も経たずに利長は死去し、高岡城は廃城となった。衰退する高岡は3代当主利常によって商工業の町へ転換が図られ、加賀藩の多くの政策によって物資の集散地の性格が与えられた。商人は職人と連携して地場産業を発展させ、鋳物や麻、綿の生産地として成長し、「加賀藩の台所」といわれるようになった。また、加賀藩の「改作法」と呼ばれる農政改革により、安定的に年貢を収集するシステムが確立され、現在の集落分布の基本形が成立した。

① 前田利長による高岡築城と城下町

高岡城が築かれた高岡台地上の関野と呼ばれる地は、当時庄川の本流であった千保川と、中田川・大門川などの庄川分流、さらに城地東側に広がる沼沢地からなる天然の水堀で囲まれた要害で、小矢部川の水運により流通経済の発達においても好適地であった。

城下町は中川・古定塚・土器町(現在の大坪町)・平米町・木町等を武家地とし、さらに越中・能登・加賀の領内3国(現富山県・石川県)だけでなく、尾張・山城・近江・越前・越後・信濃等前田氏ゆかりの地から町民を集め、35町からなる町民地を形成した。さらに守山・富山の旧城下町をはじめ射水・砺波郡から寺院を城下に招致して保護を与え、軍略的な配置に心を配った。城の東の街道沿いに主に日蓮宗・浄土宗の寺院を、城の西・市街地の南端に曹洞宗・真言宗の寺院を配置し、浄土真宗の寺院は市街地内に取り込まれた。また、金屋町の鋳物業、川原町の魚鳥商売、檜物屋町の指物・漆器、木町の木材・薪炭・回漕業等、重要な職業には職種によって場所を指定し、数々の特権を与え、町の繁栄を図った。



前田利長在城時(慶長14[1609]年~慶長19[1614]年)の高岡町(推定)
『高岡市立博物館常設展ガイドブック』高岡市立博物館/平成20年掲載図を転載・一部加工

『富山県中世城館遺跡総合調査報告書』富山県埋文センター/平成18年発行より

② 前田利常による高岡の再建～商工業都市への転換～

慶長19年（1614）に利長が死去し、さらに慶長20年（1615）の「一国一城令」により高岡城は廃城とされ、高岡町は急速に衰退した。加賀前田家3代当主利常は、御荷物宿の設置、魚問屋・塩問屋の創設を認める等、高岡の衰退を押し止め、商業の町として再興を図る政策を打ち出した。これはのちに高岡が、「加賀藩の台所」といえるほどの経済都市に発展する基盤となる。他にも北陸道のルートの変更、郊外寺院の町中への移転、旧武家地への町民移住と地子町化、利長墓所の造営、瑞龍寺の大改修など、都市計画の面からも対策を講じた。



江戸時代末期の高岡町(推定)

『高岡市立博物館常設展ガイドブック』 高岡市立博物館／平成20年掲載図を転載・一部加工

●北陸道の変更と主な街道

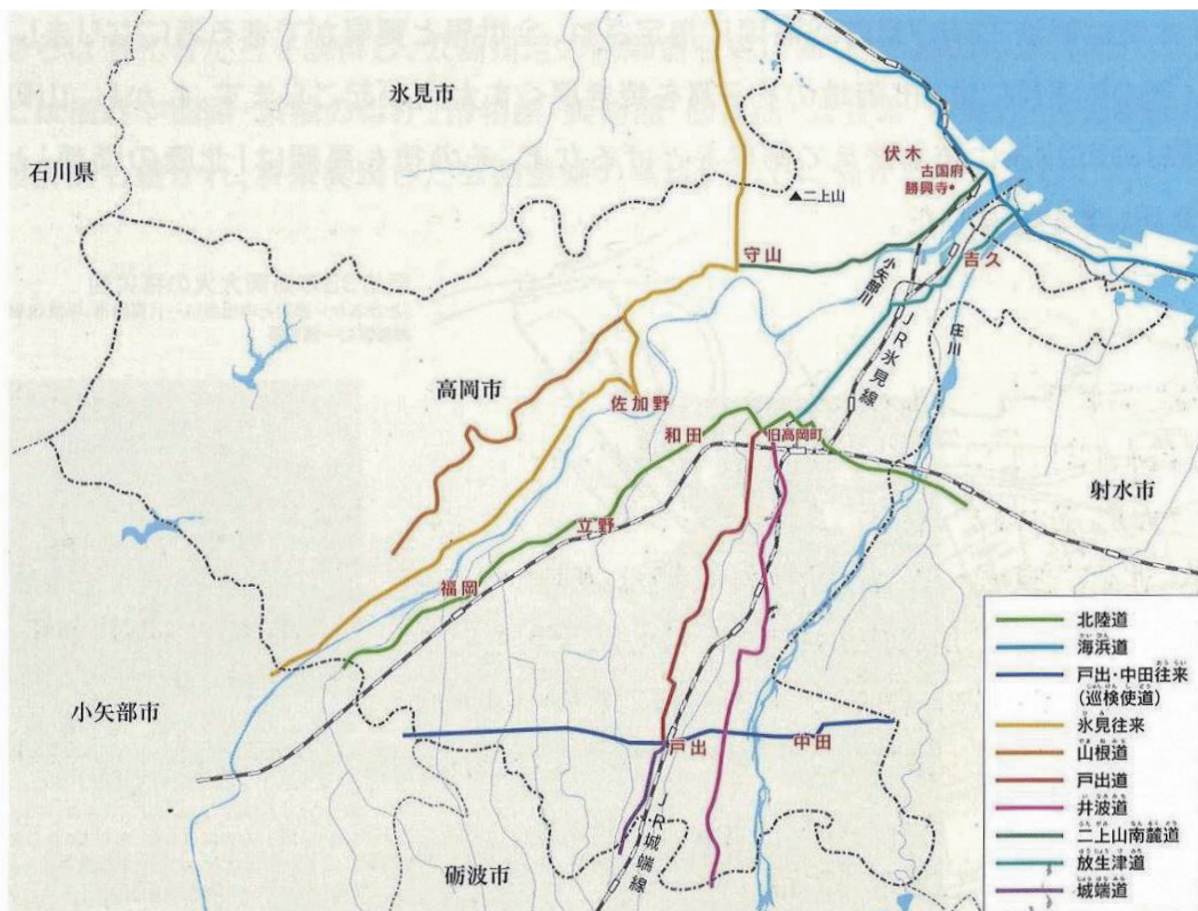
北陸道は戸出・中田往来が中心となっていたが、利長が高岡城を居城とすると今石動から小矢部川を渡り、高岡町域を経由するルートが本街道となった。高岡廃城後はルートが町中を通るように変更し、これまで小馬出町—平米町—土器町—古定塚町となっていた道順を、小馬出町から右折し、坂下町の坂を上って、大仏前で左折し、城道で再び右折、定塚町—大野—蓮華寺を経て庄川へ至る道とした。街道沿いには、高岡築城前から市場を設けることを許されていた立野以外にも福岡町や和田新町など新たに町が設けられにぎわった。道の両側には10～15m間隔で往還松が植えられ、参勤交代の行例が通過した。その他近世における主な街道は次のとおりである。

戸出・中田往来 上記のとおり脇街道となったが、戸出に御旅屋が設置され、藩主の鷹狩りの際や幕府から派遣される巡見上使の視察ルート（御上使往来）として大いに活用された。

氷見往来 今石動から小矢部川左岸の平野部を通り、二上丘陵と西山丘陵を分ける海老坂峠を経由して氷見へ通じる街道である。かつて守山城の城下町であった守山町や小矢部川が大きく蛇行する突出部の左岸の佐加野村は交通の要衝として宿駅が置かれた。御上使往来として利用され、漁業の中心地である氷見海岸で漁獲した魚類を金沢に運ぶための重要路線であった。

戸出道 道は、高岡から戸出、砺波（砺波市）、福野（南砺市）、城端（南砺市）に至る砺波平野を縦断するもので、戸出から城端は御上使往来であった。

井波道 庄川の左岸沿いに高岡から大清水（戸出）を経て井波（南砺市）へ至るもので、「中筋往来」とも呼ばれる。現在の庄川と、もとの庄川の流路であった千保川の間の筋という意味である。



高岡市内の主な町々と街道

『高岡市立博物館常設展ガイドブック』 高岡市立博物館／平成20年より

③ 前田利長墓所と瑞龍寺

3代当主利常は、自身に120万石を譲った異母兄の利長を深く敬愛していたと言われ、それは利長墓所の造営、瑞龍寺の大改修などに表れている。前田利長墓所は、利長の33回忌に当たる正保3年（1646）に造営されたもので、二重の堀で囲まれ、中心に加賀産の戸室石（安山岩）で化粧された基壇に墓標が立つ。基壇に施された「蓮花図」は狩野探幽の下絵になると伝わる。墓域全体は5万坪で大名個人の墓地としては雄大な規模をもつ。

瑞龍寺は、元は利長が高岡における前田家の菩提寺として建てた法円寺で、利長の死後、その法名「瑞龍院殿聖山英賢大居士」から瑞龍寺と改められた。正保2年（1645）から加賀藩御抱大工の山上善右衛門を棟梁として伽藍の造営が始まり、利長の50回忌に当たる寛文3年（1663）に完成した。総門、山門、仏

殿、法堂が東西に一直線上に並び、山門から法堂まで仏殿を囲むように回廊を設ける荘厳な姿は「伽藍瑞籠」として名をとどろかせた。また利常は、多くの宝物を瑞龍寺に寄進しており、利長への思いがうかがえる。

④ 高岡の商業と米場・綿場

高岡を商業の町にするための施策のうち、米場と綿場が経済的な隆盛をもたらした。

高岡米場は、寛文年間（1661～73）に米の動きを統制し、米価の調整を図るとともに、領内における米の円滑な流通に配慮するため藩が設置した。高岡では3万石を超える給人米が蔵宿を通して払い出されるほか、百姓売米も売買された。米場を中心にして米と金と人が大きく動いたのである。

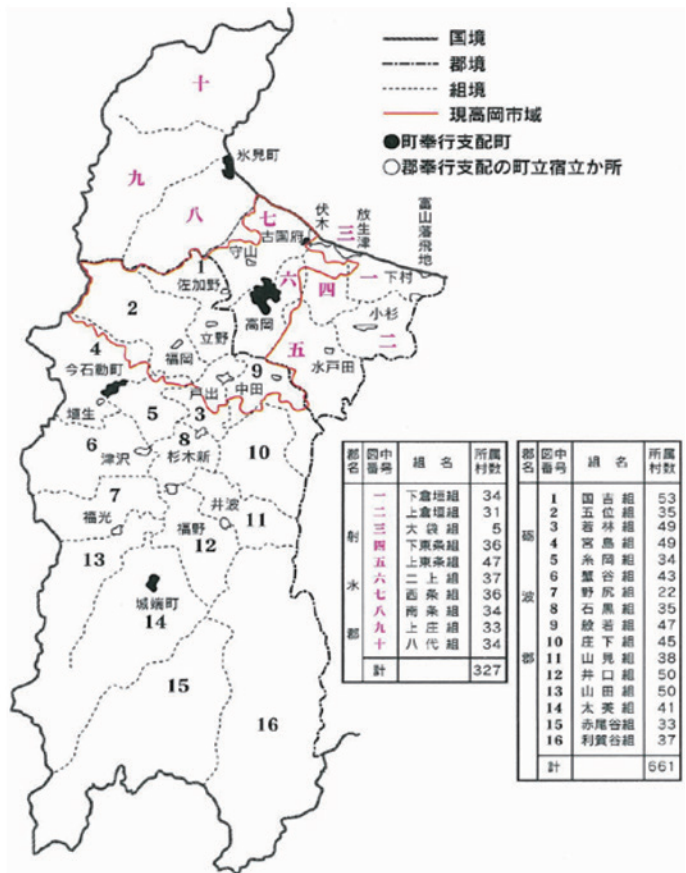
また、越中は全国有数の麻布（八講布）の産地で、高岡はその集散地として、寛永12年（1635）に布御印押人が設置され、越中産の麻布はすべて高岡で検印を受けて売り出すこととなった。さらに、寛文11年（1671）には締綿（精製綿）市場が設置され、文政7年（1824）には加越能3国での綿販売の独占権を与えられた。高岡に集められた綿は新川郡など藩内の織物産地に供給されて綿布となり、再び高岡に集められて染色加工され、「高岡染」として関西などに販売されて高岡町の経済発展に大きく寄与した。

⑤ 加賀藩農政の確立～改作法の施行～

藩の農村支配は、当初、藩や家臣（給人）がそれぞれ土地を支配しており、年貢を取り立てた。支配をめぐる農民とのトラブルは絶えることがなく、問題は年々深刻になっていた。このような事態を受け、前田利常が中心となり、改作法と呼ばれる徹底した農政改革が行われた。精緻な検地や村への定率課税などによって徴税の合理化を図るとともに農民の救済制度を設け、百姓の生活を維持しつつ年貢を安定的かつ確実に徴収することを図った。この改作法は加賀藩農政の基本となった。

● 郷村支配機構としての十村制度の整備

十村制度は藩が十か村を単位として「組」をつくり、有力農民の「十村」や「肝煎」によって統轄を行う制度である。加賀藩の改作法では、家臣の土地支配を廃し、取り立てや支配を廻る農民とのトラブルを解消した。代わりに農民から優れた人材を「十村」として取り立て、農政を任せることで、郷村の間接的支配機構を確立した。

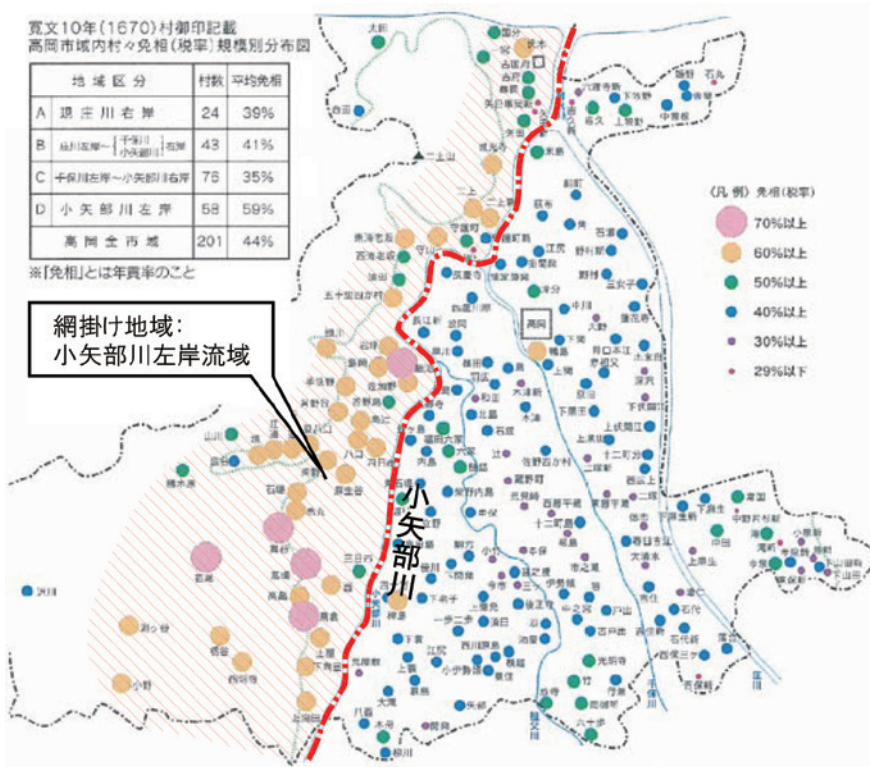


十村組割図

『高岡市立博物館常設展ガイドブック』 高岡市立博物館／平成20年より

●標準収穫量と年貢率の平準化

改作法が施行された後の寛文年間（1661～1673）の年貢率をみると、小矢部川右岸の庄川流域は、度重なる河川の氾濫によって荒地になることも多いため、年貢率は低く抑えられている。一方、氾濫の影響が少ない小矢部川左岸地域は、古代から農耕に適した土地としてみなされ年貢率は高く設定されている。小矢部川兩岸における対照的な自然条件を反映し、年貢率を調整することで領内農民の生活水準の平均化が図られていた。



寛文10年(1670)村御印記載高岡市域内村々免相(税率)規模別 分布図
『たかおかー歴史との出会いー』 高岡市政100年記念誌編集委員会/平成3年掲載図を一部加工

●河川改修・灌漑用水の開削と新田開発

加賀藩の改作法では、農地の拡大や生産性を高めるための様々な対策が講じられた。承応2年（1653）から正徳4年（1714）にかけて堤防造成工事や氾濫原となっていた庄川上流部の締切工事を行い、庄川伏流の用水化や旧河道廢川地の新田開発が進められた。また市域南東部の芦谷野段丘では、後方に控える射水南部丘陵と隔絶されているため水利に恵まれなかったが、庄川上流から用水を引き段丘上に新田を開いた。「新」と付く地名の大部分は近世の新田開発により開かれた村の名前であり、現在も市域の各地で見られる。



芦谷野用水



芦谷野用水の現状と新村

●米、その他特産物の流通システムの構築

高岡市域を流れる小矢部川や庄川、庄川の旧本流である千保川とその分流である祖父川は、街道とともに商都高岡の経済発展を支えた重要な流通網であった。加賀藩は主要な河川や街道沿いに藩の年貢米を納める御収納蔵を設置して周辺のムラの収穫米を集め、長舟によって木町や伏木に運搬した。主要街道が通る高岡町は、川舟の運漕を支配した木町や「山町」といわれる中心街などで構成され、米・綿・麻・塩などが取り引きされる、物流の拠点であった。町民の生活必需品を供給するための小売業だけでなく、加越能3国全域の商品の流通を担当する問屋業で栄えた。やがて高岡は「加賀藩の台所」といわれるまでになり、今日の高岡の礎となった。



※米場：米の出入や売買を監視する役割を担った。

綿場：加賀藩の主要産物であった木綿の原料綿を供給する役割を担った。

米、その他特産品の主な流通経路



高岡御車山祭



高岡御車山の車輪(二番町)

⑧ 高岡町が育んだ産業

高岡は、商人の町であると同時に職人の町でもあり、商工の中心であった。鋳物をはじめとして様々な産業が高岡の町の経済を支えていた。

● 鋳物

高岡の鋳物生産は、高岡開町の際に前田利長が砺波郡西部金屋から招いた7人の鋳物師の手によって始まったと伝わる。藩から手厚い保護や特権が与えられる一方で、鋳物師業界や藩のしきたりにより、品目や販売域などに制限を受けていた。高岡の商人と職人は商品開発を進めて販路を広げ、やがて高岡の鋳物は、加賀藩の御用鋳物師であった能登中居（石川県穴水町）を脅かす勢力となった。当初の鋳造品は、鍋、釜、鉄瓶、五徳など生活用の鉄器具類と、鋤や鍬などの農具類が主であった。18世紀末には鉄製の塩釜を作り、天保初年にはニシン釜で北海道へ進出した。銅器鋳造物は18世紀に現れ、梵鐘や半鐘・灯笼など大型の鋳造物にほかに、生活水準の向上とともに、仏具、花瓶、火鉢などを生産するようになった。高岡の銅器商人は全国一円に販路を広げ、幕末には横浜の外国人居留区にも販路を伸ばした。



鯿口 元禄9(1696)年

● 漆器

高岡の漆器は高岡開町の際、指物さしものを製造する町ができ、それに漆を塗ることから興ったと伝えられている。藩によって一般町民の奢侈は禁止されたため、金を用いずに装飾する技法が発達した。幕末から明治にかけて勇助塗ゆうすけぬり、錆絵さびえ、青貝塗あおがいにりなどの独創的な技法が確立し、漆器産地としての基盤が築かれた。



高岡仏壇

● 菅笠

砺波郡の特産品である菅は、旧福岡町地域を中心とした小矢部川下流域に加賀藩の奨励を受けて作付面積が拡



高岡漆器

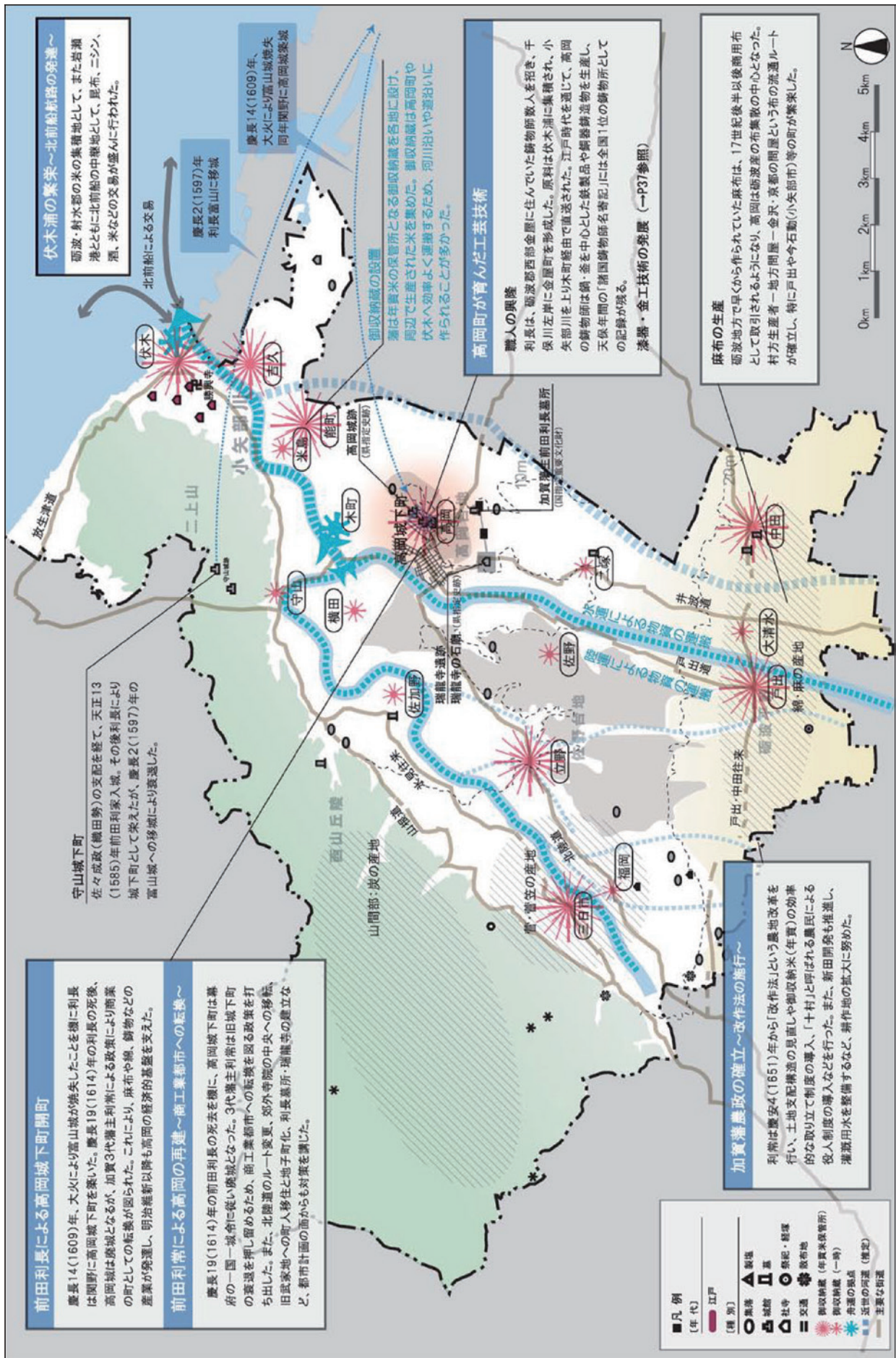
大した。小矢部川の氾濫原である湿地帯に菅が自生していたことが起源の一つとされる。農家の副業として菅笠づくりが行われた。江戸時代中～後期になると、独立した笠問屋が福岡町や立野町で多くみられるようになり、藩の産物会所が福岡町に設置されて砺波郡域の菅笠集散地として機能するようになった。製作された菅笠は、「加賀笠」の名で広く知られた。



菅 笠

●和傘

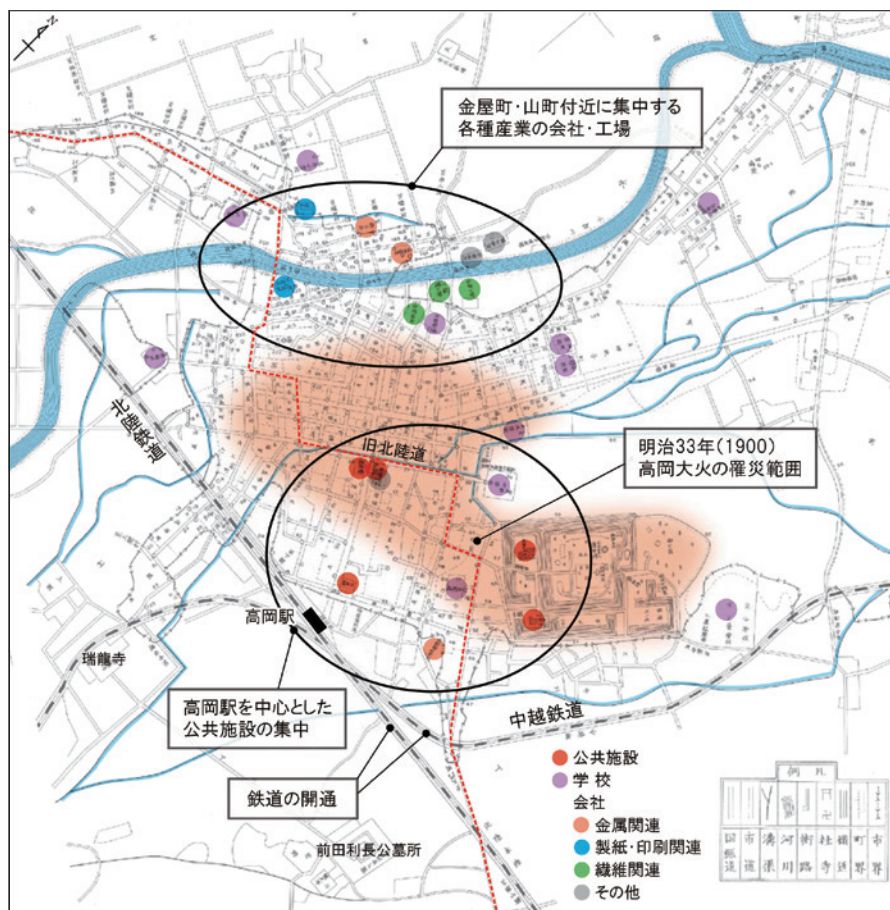
平米町を中心として傘の製造が盛んであった。使いやすく値段が安いので、藩内はもとより信濃、越後にも輸出され、高岡特産の1つであった。貧しい家の家内工業として発達したもので、貧民救済の役割を果たしており、藩も時々産業資金の貸与などをして助成した。



近世の歴史概要図

(5) 近代

明治維新を受けて武家が没落し、城下町の多くが衰退する中で、高岡はむしろ近世の間に養った実力を発揮する好機としていった。この時期は、高岡町の大商人や伏木の舟問屋、射水・砺波地方の大地主が近世に蓄積した資本を商品取引所や工場などの産業基盤や港湾や鉄道などのインフラ、実業学校などに投資し、日本海側でもいち早く近代化を進め、「北陸の商都」として発展した。高岡の発展は衰えることなく昭和12年(1937)の日中戦争以降、国家総動員体制による統制経済の強化されるまで富山県の産業経済の中心にあり続けた。



高岡市街地図—市道路線図—大正9年(1920)

① 商都の近代化

明治4年(1871)年7月、廃藩置県により高岡町を含む射水郡は金沢県に属し、同年11月に七尾県、翌5年(1872)に新川県、同9年(1876)には石川県へと所属を変えたが、同16年(1883)に現在の富山県が分離独立するに至った。この時富山と高岡の有力者たちは「富山市ニハ県庁ヲ置キ、永ク県治総括ノ地」とし、「商業ノ事ニ至リテハ高岡市之レニ任シ」と地域の発展を目指す協定を約束した。

明治33年(1900)には、大火により市街地の6割を焼失したが、山町筋では防火に優れた土蔵造りの町並みに姿を変えて復興をとげるなど、商都高岡の発展は衰えることなくその後も続いた。

● 高岡米商会所

高岡は、加賀藩随一の米場であったが、明治9年(1876)政府によって全国14カ所に米商会所が設立された際は、金沢が選ばれ高岡には設置されなかった。高岡の有力者は石川県に設立を出願したが認可を得られず、富山県が独立する際に改めて働きかけ、明治18年(1885)に高岡米商会所が開業した。米商会所の米の定期取引は先物取引が可能であり、米の価格は投機的に決定された。高岡米商会所は全国屈指の取

引高を誇り、富山県の経済をけん引した。その後高岡米穀取引所と名を変え、昭和14年（1939）に米穀配給統制法が施行されるまで続いた。

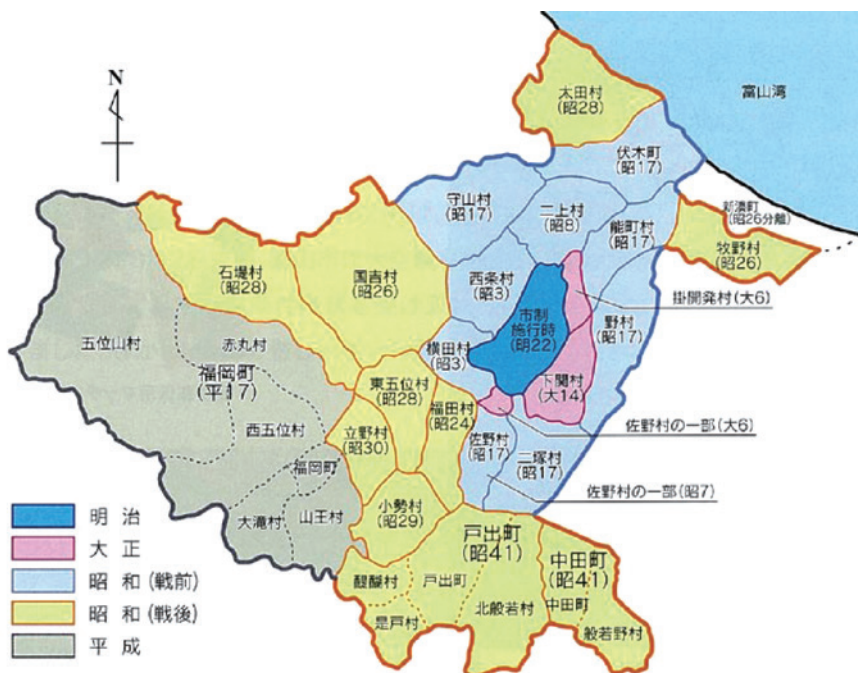
●銀行の設立

明治22年（1889）、市制施行と同じ年に高岡の有力者によって高岡銀行が設立され、日清戦争前後の好景気もあり、確固たる地盤を築いた。明治28年（1895）には、高岡銀行の経営に参加していない市内外の有力者により高岡共立銀行が設立され、両行は競い合って高岡財界の発展に大きく寄与した。第一次世界大戦後の恐慌の兆しを受けて大正9年（1920）両行は合併し、新しい高岡銀行が誕生し、本店は旧高岡共立銀行に置かれた。

② 高岡市の誕生と市域の拡大

明治21年（1888）には市制・町村制が公布され、翌年4月1日に藩政時代以来の62ヶ町により「高岡市」が誕生した。市制施行と同時に市となった都市は、城下町や日本を代表する港であり、その全国31都市の1つに高岡が入った。

高岡市は大正6年（1917）に掛開発村・佐野村の一部を編入したことを皮切りに周辺の町村を編入し、市域を広げた。昭和17年（1942）には、港を有する伏木町や新湊町らと合併し、昭和26年（1951）に新湊町・牧野村の分離があったものの、同年の牧野村の再編入をはじめ、その後も市域を拡大し、昭和41年（1966）には戸出町、中田町を編入した。現在の高岡市域は、旧「高岡市」をはじめ、射水郡内1町12ヶ村及び砺波郡内の3町15ヶ村が基盤となっている。



高岡市域の変遷

『高岡市立博物館常設展ガイドブック』 高岡市立博物館／平成20年より

③ 地場産業の振興

明治26年（1893）、江戸時代以来の綿・木綿の集散地であった高岡町に日本海側初の紡績工場として高岡紡績株式会社が設立され、また同年、八講布の産地として知られた戸出町に戸出物産合資会社が設立されたが、どちらも高岡、戸出それぞれ地元の民間資本のみによるものであった。このように近世に蓄積した商業資本により近代化が図られた。

また、近世から発達してきた高岡銅器は、近代には国の殖産興業として国内外に広まった。廃藩により職を失った加賀・富山藩の優秀な彫金師を招いたことで、技術力も向上し、万国博覧会へ出品し、入賞を重ねた。明治27年（1894）、高岡に県立工芸学校が創設され、生徒の教育だけでなく鋳物や漆器等の技術の研究や製品の開発、デザインの作成まで行い、技術の発展に貢献した。

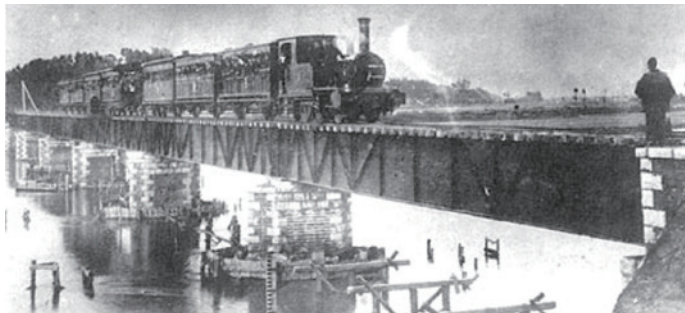
●高岡捺染

江戸時代、「高岡染」は関西で好評を得ていたが、明治時代には関西の染色工業に押され衰退した。しかし、笹原文次、井上佐太郎の2人の独創的な功績により、綿友禅の精巧な量産を可能にし、その経済性と京友禅に見劣しない鮮麗な色彩と斬新な意匠によって生産額日本一の実績をもつ地場産業となった。平成の初めごろまで高岡の花形産業の1つであった。

④ 流通システムの整備

明治20年（1887）の私設鉄道条例や同25年（1892）の鉄道敷設法などをきっかけに、物資の大量輸送のため、鉄道の敷設を望む声が高まった。明治30年（1897）、県内初の鉄道・民営中越鉄道（現 JR 城端線・氷見線）が開通し、同年12月に官設北陸鉄道（現 あいの風とやま鉄道）が開通した。明治32年（1899）には伏木港の開港場指定され、流通網が整備された。これらは高岡の商業能力の強化に大きな役割を果たした。

伏木港と砺波・射水平野の穀倉地帯を結ぶ大動脈は、小矢部川・庄川等の水運から、鉄道・道路の陸運に変わった。これにより、物資の流通や保管のシステムは河川に沿って設置された御蔵や倉庫を通して行われる形態から、物資の広域的な流通に適う国有鉄道の駅や道路沿いの倉庫等を通して行われる形態へと変化した。



中越鉄道の開通

『高岡市立博物館常設展ガイドブック』
高岡市立博物館／平成20年より



高岡駅(大正)

『高岡開町370年市政施行90周年記念写真集』
高岡市／昭和54年より

●庄川の改修と伏木築港

庄川は古くから氾濫を繰り返し、庄川扇状地の西へ東へと何度も本流と支流の位置を変えてきた。伏木港が開港した明治32年（1899）当時、伏木港は庄川が合流する小矢部川の河口港であった。河口港は穏やかな水域を確保できる一方で、上流からの土砂が堆積するため常に浚渫する必要があり、洪水の危険性も持った港であった。明治に行われた庄川分離工事により大型汽船が棧橋に接岸できる近代港湾となり、現在の港の原型ができあがった。

●庄川の本流の変遷

①奈良・平安時代

後に野尻川と呼ばれるようになった河道をとって
たとえられ、高瀬・福野を経て津沢の付近で小矢部
川に合流し、奈良時代には雄神川と呼ばれていた。

②鎌倉・室町時代

中村川や荒又川が本流であった。

③戦国時代～安土桃山時代

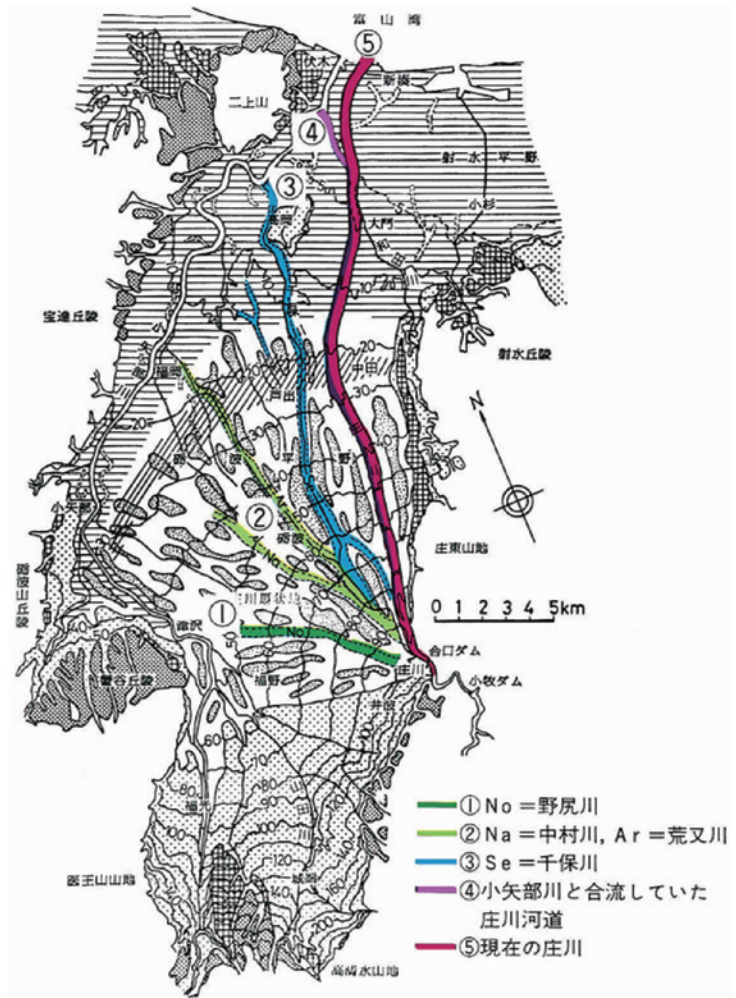
現在の舟戸口用水とその下流の千保川とが庄川本流
で、後に設けられた高岡本町付近で小矢部川に合流し
ていた。

④江戸時代

天正13(1585)年に大地震があり、庄川の河道が青島
周辺で二分し、それまで支流であった中田川とその下
流の大門川筋も一つの本流になった。その後再び千保
川筋が本流となったが、氾濫が続き瑞龍寺を押し流す
危険が高まったため、寛文10(1670)年～正徳4(1714)
年まで44年間に亘る大工事により本流の切り替えが行
われた。この工事により千保川の水量は徐々に減少し、
千保川と小矢部川の落合に形成されていた木町が、浦
としての用をなさなくなったため、外海船の船着場と
しての機能を伏木に奪われる形となった。

⑤明治時代～現在

新しく本流となった中田川・大門川の小矢部川との
合流地点である小矢部川下流の能町や伏木で洪水が起
こるようになったため、明治33(1900)年より河川改修
工事が行われた。この改修の結果、庄川は小矢部川と
分断し、庄川の氾濫は激減した。



地形分類図にみる庄川旧河道の痕跡

『たかおかー歴史との出会い』
高岡市政100年記念誌編集委員会／平成3年より

●臨海工業地帯の発展

伏木港では、明治40年(1907)、北陸人造肥料会社
の設立を皮切りに、大正時代にかけて次々と工場が建
ち、日本海沿岸で最も早く臨海工業地帯が形成された。
この契機となったのは第1次世界大戦(大正3～7年
(1915～1919))の軍需景気で安価な電力、豊富な工業
用水、整備された良港を求めた三井などの旧財閥系が
資本を投資したことであった。工業地帯の形成に伴い、
伏木港も商業港から工業港へとその性格を大きく変え
ていった。



伏木海港湾

『高岡市立博物館常設展ガイドブック』
高岡市立博物館／平成20年より

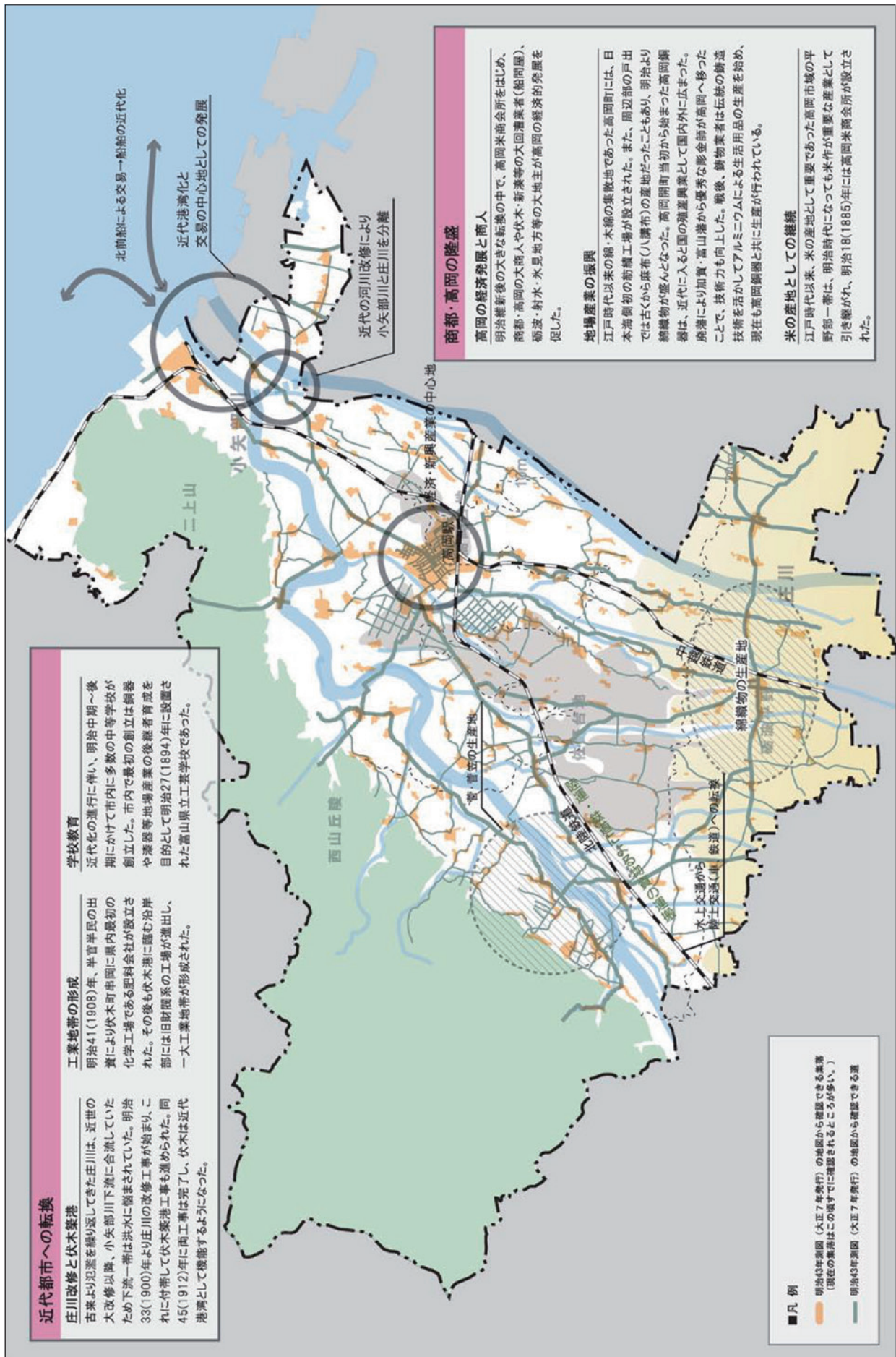
⑤ 高岡大仏（銅造阿弥陀如来坐像）

坂下町の極楽寺には高さ約9.7mの大仏があったが、文政4年（1821）の大火で焼け、天保14年（1841）に再建されていた。明治33年（1900）の大火で再び焼けてしまう。篤信家の松木宗左衛門^{まつきそうざえもん}が大仏再建を志して駆け回り、明治40年（1907）、高岡の名士52名で大仏再建事務所が立ち上げられ、火事に強い銅製の坐像として再建されることとなった。4年後に大仏の頭が完成したが資金難が続き、また、大正8年（1919）に作業中に溶かした銅がこぼれる事故が起きて工事が中断、さらに翌年宗左衛門が亡くなると、工事は完全に停まってしまった。その後、昭和3年（1928）に荻野宗四郎^{おぎのそうしろう}が多額の寄付をしたことをきっかけに再建の機運が盛り上がり、さらに銅器職人たちが材料を持ち込み、無償で作業をしてようやく完成し、昭和8年（1933）開眼供養が行われた。

像高7.43mの大仏は、造型、鋳造、研磨、着色まで全ての工程を高岡の職人が担い、官製でも観光用でもなく民間の寄付によってつくられており、銅器のまち高岡のシンボルとなっている。



銅造阿弥陀如来坐像(市指定)



近代都市への転換

庄川改修と伏木築港

古来より氾濫を繰り返してきた庄川は、近世の大改修以降、小矢部川下流に合流していたため下流一帯は洪水に悩まされていた。明治33(1900)年より庄川の改修工事が始まり、これに付帯して伏木築港工事も進められた。同45(1912)年に西工事は完了し、伏木は近代港湾として機能するようになった。

工業地帯の形成

明治41(1908)年、半官半民の出資により伏木町半岡に県内最初の化学工場である肥料会社が設立された。その後も伏木港に臨む沿岸部には旧財閥系の工場が進出し、一大工業地帯が形成された。

学校教育

近代化の進行に伴い、明治中期～後期にかけて市内に多数の中等学校が創立した。市内で最初の創立は綿器や漆器等工場産業の後継者育成を目的として明治27(1894)年に設置された富山県立工業学校であった。

近代の河川改修により
小矢部川と庄川を分離

北前船による交易→船舶の近代化
近代港湾化と
交易の中心地としての発展

商都・高岡の隆盛

高岡の経済発展と商人
明治維新後の大きな監視の中で、高岡米商会所をはじめ、明造・高岡の大商人や伏木・新湊等の大回漕業者(船問屋)、船波・射水・水見地方等の大地主が高岡の経済的発展を促した。

地場産業の振興

江戸時代以来の綿・木綿の集散地であった高岡町には、日本海創初の紡績工場が設立された。また、周辺部の戸出では古くから麻布(八講布)の産地だったこともあり、明治より綿織物が盛んとなった。高岡町当初から始まった高岡綿織は、近代に入ると国の殖産興業として国内外に広まった。虎藩により加賀・富山藩から優秀な彫金師が高岡へ移ったことで、技術力も向上した。戦後、新物業者は伝統的製造技術を活かしてアルミニウムによる生活用品の生産を始め、現在も高岡綿織と共に生産が行われている。

米の産地としての継続

江戸時代以来、米の産地として重要であった高岡市域の平野部一帯は、明治時代になってからも米作が重要な産業として引き継がれ、明治18(1885)年には高岡米商会所が設立された。

- 凡例**
- 明治43年測図 (大正7年発行) の地図から復元できる集落 (現在の集落はこの位置までに復元される場合が多い。)
 - 明治43年測図 (大正7年発行) の地図から復元できる道

近代の歴史概要図

(6) 現代

第二次世界大戦後の高岡は、戦後復興を果たし、高度経済成長期で大きく躍進した。そして平成17年(2005)11月1日に、高岡市は福岡町と合併して新しい高岡市となった。平成27年(2015)の北陸新幹線金沢開業を受けて、新高岡駅を飛騨・越中・能登の玄関口と位置づけ、伝統の金属加工をはじめとした各種工業など多様な産業を育み、「ものづくりのまち高岡」を全国へ発信し、活力と魅力あふれるまちづくりを推進している。

●高岡産業博覧会

高岡産業博覧会は、昭和26年(1951)に高岡古城公園を会場として開催された。この博覧会は、日本の豊富な電源力と産業を紹介しながら、地方産業の振興を目的とし、特に富山県の電力が豊富で安価なことを強くアピールした。50日間の会期中に620,000人以上の入場者を集めた。

●アルミニウム産業

砂型や鑄造技術など高岡の鑄物技術は、アルミニウム加工に共通するところがあり、また、富山県は水力発電が豊富でアルミニウム生成に必要な電力が安価であったことなど、高岡にはアルミニウム産業が発展する土壌が備わっていた。昭和6年(1931)満州事変が起きると鉄・銅製品が不足し、アルミニウム製品の需要が増大した。市街地は空襲による被害を免れたので、銅器生産の設備は無傷で残った。兵役を終えた鑄物職人は、伝統の鑄造技術を活かし、軍需物資ではないアルミニウムに目をつけ、生活用品(鍋・釜)を生産した。戦後の物資不足のなか、“作れば売れる”という「鍋釜景気」により、復興の足掛かりをつかんだ。現在、高岡市のアルミニウム産業は、主に住宅用・ビル用の建材を生産し、日本国内の主要な産地になっている。

●民衆駅の地下街

国鉄高岡駅は、明治31年(1898)に建設され、狭隘で老朽化が激しかったため、昭和41年(1966)、日本国有鉄道と地域が共同建設する民衆駅方式で高岡駅(高岡ステーションビル)を建設し、さらに当時は東京、大阪、名古屋、福岡のほか札幌や横浜、岡山など数えるほどしかなかった地下街を昭和44年(1969)に建設している。高岡駅地下街には多くの人が訪れにぎわった。

●現代のものづくり

高度経済成長の好景気で会社などの記念品の注文が増え、高岡の銅器は最盛期を迎えた。その後の景気の悪化の中でも設備を近代化させ、鑄込みや着色技術の向上などによって発展し、昭和50年(1975)には高岡銅器が国の伝統的工芸品に指定された。

近年は、錫を活かした食器や銅器着色技術を活かした服飾など高岡発の技術が幅広い分野で躍動している。また、銅や鉄だけでなく、亜鉛、錫、アルミなど様々な素材を使ったものづくりのほか、高岡漆器や越中福岡の菅笠の伝統産業技術を活かした商品開発などが行われている。ものづくりのまち高岡では伝統産業だけでなく多岐にわたる製品・技術の開発が行われ、発展を続けている。

●ものづくり・デザイン科

平成18年(2006)、「ものづくり・デザイン人材育成特区」の認定を受けて、市独自の教科「ものづくり・デザイン科」を市内すべての小・中・義務教育・特別支援学校の小学5年から中学1年までの必修とした。伝統工芸品製作の見学や、制作体験などを行い、郷土の伝統的工芸品や産業やすぐれた技術をもつ人々に触れ、豊かな感性と郷土を愛する心を育てている。